

亀山トリエンナーレ 2024

記録誌

亀山トリエンナーレ KAMEYAMA TRIENNALE 2024 記録誌



亀山トリエンナーレ

2024



亀山トリエンナーレ
2024

記録誌



目 次

04	実行委員会より
06	亀山トリエンナーレ 2024 に寄せて / 監修・井上隆邦
07	亀山市長あいさつ
08	オフィシャルマップ
15	展示作品
15	東町商店街
25	西町・明治天皇行在所
29	加藤家屋敷跡
33	旧館家住宅
41	旧佐野家住宅
43	亀山市文化会館
47	関宿
55	鈴鹿峠自然の家
61	記録写真
	審査 / 現地説明会
	リサーチ
	搬入・展示
	オープニングレセプション
	会期中の光景
	表彰式・搬出
70	亀山トリエンナーレアワード
73	イベント・ワークショップ
74	特別企画・建畠哲講演会
75	クロストーク「市民による自立的な芸術祭～亀山トリエンナーレの足跡～」
78	N0 NAME sound performance
80	サククス × スピーカによる立体音響
81	ワークショップ
82	cafe@ 亀山 / 魔女のお茶会
83	亀山トリエンナーレに寄せて
93	報道
105	広報
108	亀山トリエンナーレ 足跡
112	亀山トリエンナーレ 2024 を終えて ～事務局長より～
114	協賛・協力
115	編集後記

「亀山トリエンナーレ2024」は10月27日より11月16日まで開催いたしました。

前回2022年から2年後の開催でした。

トリエンナーレは3年に1度の芸術祭なのですが、コロナ禍による順延もあり「かめやま文化年2024」と同時開催といたしました。

そんな訳で準備期間も短く、実行委員一同、大変忙しい思いをした「亀山トリエンナーレ2024」の開催でした。

この度、皆様のご協力、ご支援を得て大好評のうちに終了することができましたことに心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

会期の初めは暑いくらいの気温でしたが、閉幕が近づくにつれ寒く感じるようになりました。

それでも、例年に比べ亀山城多門櫓の大きな銀杏の木の色づきは遅かったようです。

今回の展示場所は亀山宿～関宿～坂下宿と旧東海道の三つの宿を繋ぐことができました。歴史文化の香り漂う城下町亀山、往年の面影が残るまちなみが美しい関宿、鈴鹿の緑ゆたかな山並みの麓、坂下。

それぞれの「場」に展示された現代アートが来場者の感覚を揺すぶったのではないのでしょうか。現代アートは思考や洞察を通じて楽しむことができるアートです。

現在の社会の情勢や問題を喚起し、作家たちは多様な表現でビジュアル化しています。

とっつきにくいと言われてきた現代アートですが、亀山では皆さまがとても楽しんでくださっているように見受けられました。

2008年から街にアートを取り入れ着実に積み重ねてきた経緯が現代アートを身近に感じていただけるようになったのだと自負しています。

青いマップを片手に期間中、大勢の方たちが街を歩いてくださいました。

子どもたちは商店街を走り回って作品の前で「すごい!」「きれい!」と声をあげてくれました。

見たかった光景が目の前に現れた、本当に幸せな3週間でした。

海外から全国各地から出展いただきました作家の皆さまをはじめ、来場者の皆さま、ボランティアスタッフの皆さま、住民の皆さま、ありがとうございました。

ご協賛いただきました財団、企業、個人の皆さま、取材してくださったメディアの皆さま、ありがとうございました。

そして、事業協力をいただきました亀山市に感謝申し上げます。

最後になりましたが、監修者としてご指導くださった井上隆邦さん、大変お世話になり、ありがとうございました。

予定通りですと、次回の亀山トリエンナーレは2027年に開催です。

実行委員会で話し合いを重ね、より充実した亀山トリエンナーレ2027を開催できるよう努力を重ねたいと思っています。

亀山トリエンナーレ実行委員一同

亀山トリエンナーレ2024に寄せて

監修 井上 隆邦

国内外からアーティスト81名の参加を得て、亀山トリエンナーレ2024が開催されることを嬉しく思います。亀山トリエンナーレの前身である「アート亀山」時代を含めれば、この間、16年の歳月が流れ、これまでに参加したアーティストは延べ680名を超えました。

ご承知の通り、このトリエンナーレでは二つの目標を掲げております。一つは新人の発掘、その登竜門を目指すというものです。もう一つの狙いは、国際交流の促進です。幸い、新人の登竜門という点では、過去に参加したアーティストの中には、その後、大阪万博の仕事を手掛けたり、或いは国内有数の映画祭でグランプリに輝いた方もおります。一方、国際交流の促進というテーマでは一定数の方々が海外から参加しておりますが、今後は東アジアや東南アジアなどからの参加も得たく、そうした環境の整備が課題となっております。

亀山トリエンナーレの展示会場は当初は商店街の空き店舗が中心でしたが、現在は、市内の古民家、武家屋敷跡、寺社仏閣、廃校となった校舎などを積極的に活用しております。展示作品は、平面、立体、映像、インスタレーションなど多岐にわたっております。亀山は江戸時代の宿場町の風情を色濃く残している地域ですが、こうした地域に最先端の現代美術を展示することを通じて、過去と現代との対話や、新たな創造的な空間が生まれることを期待しています。

亀山トリエンナーレでは優れたキュレーション実績があり、国内外の現代美術に詳しい方による講演会を実施しております。前回のトリエンナーレでは森美術館の特別顧問である南條史生さんに講演をお願いしましたが、今回は、美術評論家として活躍中の建畠哲さんにご登壇をお願いしております。建畠さんは、かつてベニスビエンナーレで草間弥生を世界に向けて紹介、注目されました。また、過去には国立国際美術館館長や多摩美術大学学長なども歴任されております。

亀山トリエンナーレを実現するには多くの裏方的な作業が伴います。一連の、根気の要求される作業を積極的に支えてこられた実行委員、ボランティア、亀山市役所の方々、また限られた人員の中、膨大な事務作業を担当された事務局に対して改めて感謝申し上げます。資金面で快く支援くださった財団、企業にも厚く御礼を申し上げます。

亀山トリエンナーレは三重県では唯一の現代美術の祭典として歴史を重ねてきましたが、今後とも皆様のご支援のもとその更なる発展と展開を願っております。

(元三重県立美術館館長・横浜トリエンナーレ2005事務局長)

『亀山トリエンナーレ2024』によせて

亀山市長 櫻井 義之

国内外から81組の作家の皆様が集結いただき、亀山の秋に彩を添えていただいた「亀山トリエンナーレ2024」の大成功をお慶び申し上げます。また、現代美術の祭典をこの亀山に根付かせ、育ててくださいました伊藤峰子代表・森敏子事務局長はじめ、これまでトリエンナーレを支えていただきました企画・監修の井上隆邦様、そして実行委員会の皆様のご尽力に心より敬意と感謝を申し上げます。

さて、2008年からの「アート亀山」を含め、亀山トリエンナーレは、東町商店街から西町、野村三丁目まで、歴史的なまちなみと近代の商店街の2つの姿を対にしながら、作家の皆様の溢れる感性で亀山の魅力を一段と引き出していただいてまいりました。そして、今回の亀山トリエンナーレ2024では、「かめやま文化年2024特別企画」として、旧田中家住宅や鈴鹿峠自然の家など関エリア・坂下エリアにも展示場所が拡大し、更に魅力が向上する中、新進気鋭の作家の皆様による個性豊かつ渾身の作品は、東町商店街と旧東海道の風致と調和し、市内外の多くの方々を魅了する祭典となりました。歴史が織りなす地域固有の風情とともに、凛とした空気感と現代アートとの不思議な融合は、それぞれの価値と魅力を相互に高め合い、人々の交流を促進し、まちを活性化するサプリメントとなることを体感する機会ともなりました。

一方、本市におきましても、令和6年度には「かめやま文化年2024」を開催し、「まちがにぎわいこどもがわらう」をキャッチコピーに、コロナ禍で減少した子どもたちの文化芸術活動に参画する機会の充実に努めつつ、文化の継承と創造を育む事業を実施し、まちの賑わいや魅力の創出に努めたところです。また、観光振興の分野では、本市の特徴である歴史、文化、芸術など観光コンテンツを効率的かつ効果的に情報発信するために観光プロモーションのコンセプトを「アートが生まれる街、亀山」と設定し、地域ブランディングに取り組んでいます。今後も、このまちに暮らす人々の営みの中で培われ、時代や世代を越えて継承され、新たな創造につながる文化芸術を生かしたまちづくりを推進してまいります。

結びに、「亀山トリエンナーレ」の益々のご発展と今回ご参加いただきました作家をはじめ関係者の皆様方のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

亀山トリエンナーレ 2024

KAMEYAMA TRIENNALE 2024

Official Map

2024.10.27 sun. — 11.16 sat.



亀山トリエンナーレ 2024 ご来場いただきありがとうございます。
今回は国内外から参加した 81 組のアーティストが市内各所に展示します。
「場」を生かした現代アートを亀山の歴史文化と共に楽しみください。
アートを観ることを通して私たちの社会や未来を考えるキッカケになれば幸いです。

亀山トリエンナーレ実行委員会

Thank you for visiting the Kameyama Triennale 2024. This year, 81 artists and groups from both Japan and abroad will be exhibiting their works in various locations throughout the city. We hope you enjoy the contemporary art that makes use of the unique 'places' alongside the rich history and culture of Kameyama. We also hope that through viewing the art, it will serve as an opportunity to reflect on our society and future.

Kameyama Triennale Executive Committee

亀山には江戸時代の宿場町としての風情が色濃く残っています。
こうした地域で最先端の現代美術を展示することを通じて過去と現代との対話、新たな創造的な空間が生まれることを期待しています。

監修者 井上隆邦

Kameyama is a region that retains the strong atmosphere of a post town from the Edo period. By exhibiting cutting-edge contemporary art in such a region, we hope to foster a dialogue between the past and the present, and to create a new, creative space.

Supervisor Takakuni Inoue

EVENT

特別企画 □ 建畠哲 講演会

「アートによる地域の活性化」

10月27日(日) 14:30 - 16:00 □ 入場無料

亀山市中央コミュニティセンター(亀山市文化会館内) ②⑤



HRATCH ARBACH x EISUKE OOOKA

「N0 NAME sound performance」

10月27日(日)

18:30 - 19:15 □ 入場無料
亀山市中央コミュニティセンター
(亀山市文化会館内) ②⑤

加藤和也 x 天野知亜紀

「サクセス x スピーカー
による立体音響」

11月2日(土)

15:30 ~ 40分程度 □ 入場無料
旧木村邸 ②⑥

藤原智也 x 森敏子 □ クロストーク

「市民による自立的な芸術祭
〜亀山トリエンナーレの足跡〜」

11月10日(日)

13:30 - 14:30 □ 入場無料
亀山市市民協働センターみらい ①

ピカソスイッチ

「ワークショップ」 11月4日(月・祝)

■「妖精の扉」をつくりましょう 10:30 - 11:30

参加費 ¥1,000 / 定員 20名 ※小学2年生以下のお子さまは保護者同伴をお願いします。

■妖精そうちで妖精体験

参加無料 / 先着順 13:30 - 15:30

※体験時間 5~6分

東町ふれあい広場 ⑪ (雨天時、亀山市市民協働センターみらい)

申し込み □ picaso.switch.event@gmail.com

アトリエ美園

「ワークショップ」 11月2日(土)

■紙版画 10:00 - 11:30

■アルミホイルアート 13:30 - 14:30

定員各回 8名 参加費無料 要予約

亀山市市民協働センターみらい ①

申し込み □ 090-4860-3014

亀山トリエンナーレ 2024

期 間 □ 2024年10月27日(日) — 11月16日(土) 10:00 - 17:00 (最終日は16:30まで)

※展示場所により16:00で終了する場合があります。

観覧料 □ 500円 (旧館家住宅のみ 高校生以上) ■ 他は観覧無料

総合案内所 休憩所 □ 亀山市市民協働センターみらい ①

By car

各地 — 新名神高速道路 — 亀山 IC 10分 — 会場
東名阪自動車道 名阪国道

By public transport

名古屋駅 — JR 関西本線 — 亀山駅 — 徒歩 10分 — 会場
JR 東海道 山陽本線 草津駅 — JR 草津線 関駅 — JR 関西本線 亀山駅 — 徒歩 10分 — 会場
伊勢市駅 — JR 紀勢本線 津駅 — JR 紀勢本線 亀山駅 — 徒歩 10分 — 会場

WEB/SNS



亀山トリエンナーレ WEB
<https://kameyamatriennale.com/>



art.kameyama



kameyamatriennale

■ 亀山トリエンナーレ事務局 (森)

519-0137
三重県亀山市阿野田町 1060
tel : 090-8950-3011
mail: artkameyama@gmail.com

■ 亀山市市民文化部文化課文化創造グループ

tel : 0595-96-1223
mail: bunka@city.kameyama.mie.jp

主催 | 亀山トリエンナーレ実行委員会 共催 | かめやま文化年実行委員会

事業協力 | 亀山市 企画・監修 | 井上隆邦

助成 | (公財) 岡田文化財団 エア・ウォーター株式会社

後援 | 亀山市東町商店街振興組合 (公財) 亀山市地域社会振興会

亀山商工会議所 (一社) 亀山市観光協会

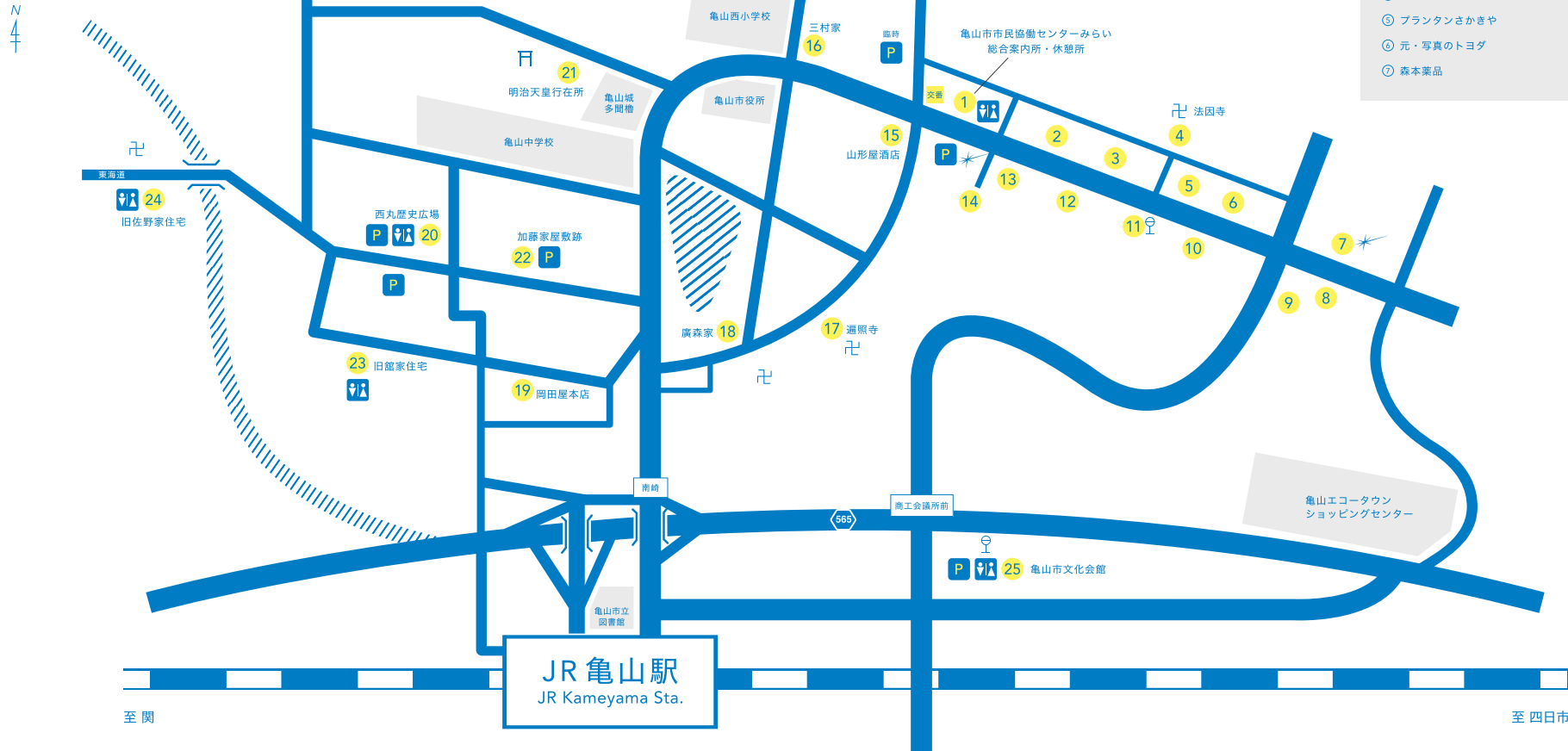
亀山エリア

Kameyama Area

亀山市東町商店街

※会期中、定休日等による
お休みの店があります。

- | | |
|------------------|---------------------|
| ① 亀山市市民協働センターみらい | ④ 阿部家 |
| ② 高村書店倉庫 | ⑤ トヨタ倉庫 |
| ③ 今田家シャッター | ⑥ 元・中村こんにやく店 |
| ④ 法因寺 | ⑦ 東町ふれあい広場 |
| ⑤ プランタンさかきや | ⑧ 小林時計舗 |
| ⑥ 元・写真のトヨタ | ⑨ 元・アトスペース kusukusu |
| ⑦ 森本薬品 | ⑩ 崖の上の古民家 |



- 寺院 / temple
- 神社 / shrine
- 駐車場 / parking
- トイレ / toilet
- 文化年ぐるっと循環バス停 / bus stop
- 公式グッズ販売 / Official Goods



Google map

- | | | | | | |
|--|---|--|--|---|--|
| ① 亀山市市民協働センターみらい
Kameyamashi Shimin Kyodo Center Mirai
岡本ヨシヒロ / アトリエ美園 | ⑦ 森本薬品
Morimoto Drug Store
的場乃莉華 | ⑫ 小林時計舗
Kobayashi Clock Store
土方英俊 | ⑮ 山形屋酒店
Yamagataya Liquor Store
伊藤明淑 | ⑲ 岡田屋本店
Okada Main Store
momo- 植村胡桃 | ⑲ 岡田屋本店
Okada Main Store
momo- 植村胡桃 |
| ② 高村書店倉庫
Takamura Bookstore Warehouse
園田源二郎 | ⑧ 阿部家
Abe's House
伊藤亜優子 / 小野結彩
/ 川原田洋子 / 中林晴香
/ 倉岡雅 | ⑬ 元・アトスペース kusukusu
Former Art Space kusukusu
KAO'RU Shibahara - 柴原薫 - | ⑯ 三村家
Mimura's House
長縄功太郎 | ⑳ 西丸歴史広場
Nishimaru Rekishi Hiroba
鈴木良治 | ㉓ 旧館家住宅 *展示時間 / 10:00-16:30
Kyu Tachi-ke Jutaku
伊賀上良太 / 伊藤龍彦 / 枝光由嘉里
/ MOTU / Kim Youngsuk / 小林園実 / 鈴木幸永
/ 高氏奈津樹 / 田中七星 / 土井健史 / 山田なつみ
/ Setsuko Nakashima Dameme / 白水ロコ
/ 原憲太郎 / 晶蔵 / HRATCH ARBACH |
| ③ 今田家シャッター
Imada Family Shutter
あまのしんたろう | ⑨ トヨタ倉庫
Toyota Warehouse
荻野良樹 | ⑭ 崖の上古民家
Gakeno-ue old folk house
SIM_Moby / 森敏子 | ⑰ 遍照寺
Henjyou-ji Temple
里村英昭 / 田島悠史 | ㉑ 明治天皇行在所 *展示時間 / 10:00-16:00
Meiji Tenno Anzaisho
大岡英介 - Eisuke oooka / 服部奈奈 / 井谷うらん | ㉔ 旧佐野家住宅 *展示時間 / 10:00-16:30
Kyu Sano-ke Jutaku
Etsuko Kato / 高北幸夫 / オノ・ミチ・ヒロ |
| ④ 法因寺
Houin-ji Temple
森本紗月 / 藤田昌久 | ⑩ 元・中村こんにやく店
Former Nakamura Konnyaku Store
計良明子 / 寺本美穂 | ⑪ 東町ふれあい広場
Higashimachi Fureai Hiroba
ピカソ・スイッチ | ⑱ 廣森家
Hiromori's House
堂本清文 | ㉒ 加藤家屋敷跡 *展示時間 / 10:00-16:30
Kato-ke Yashikiato
宮寄祥子 / 黒宮亮介 / 中村岳
/ Masaki Hagino- 萩野真輝 / Akiko Higuchi
/ 森正樹 / 松岡歩未 / 市川雄康 | |
| ⑤ プランタンさかきや
Printemps Sakakiya
カノシオニ | | | | | |
| ⑥ 元・写真のトヨタ
Former Toyota Photo Studio
倉岡としえ | | | | | |

関エリア

Seki Area

関宿は東海道 47 番目の宿場町で交通の要衝として栄えました。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された 1.8km の町並みは、宿場町の旧態をとどめています。現代アートとともに関宿の散策もお楽しみください。



- ②6 旧木村邸(庭)
Kyu Kimura-tei(Niwa)
浅野言朗
- ②7 旧田中家住宅
Kyu Tanaka-ke jutaku
* 展示時間 / 10:00-16:30
天野知重紀 / 小畑亮平 / 花澄 / 下村雄三 / 野口翠蓮
/ Hector Falcon / Omar Torres / Sato Sugamoto
/ TimoWRIGHT / WILLIAM NORTON / Melinda McCoy
/ LILY JAZZ HOSOTANI + MEGUMI FUKUDA / Cake Hara

- ②8 旧落合家住宅
Kyu Ochiai-ke jutaku
* 展示時間 / 10:00-16:30
小寺諒 / Miranda Martinez
/ Ryan Miller

- ②9 百六里庭
Hyakurokuritei
山田風雅

- ③0 鈴鹿峠自然の家(旧坂下尋常高等小学校)
Suzuka Toge Shizen no ie(Kyu Sakashita Jinjo Koto Shogakko)
* 展示時間 / 10:00-16:00
* 11月9日のみ 20:00 まで観覧可能
市川雄康 / 井谷うらん / 伊藤龍彦 / オノ・ミチ・ヒロ
/ 倉岡としえ / 倉岡雅 / 田村公男 / 堂本清文 / 長縄功太郎
/ 藤田昌久 / 森敏子 / Cake Hara / WILLIAM NORTON

Star Festa 2024 親子でわいわい星まつり(坂下星見の会)
11月9日(土) 20:30 プロジェクションマッピング上映

文化年ぐるっと循環バス ■ 運賃：無料

運行日 ■ 10月27日(日) / 11月2日(土) / 3日(日・祝) / 4日(月・振休) / 9日(土) / 10日(日) / 16日(土)

時刻表		■ 亀山市文化会館 ▶ 東町商店街 ▶ 関支所 ▶ 鈴鹿峠自然の家 ▶ 関支所 ▶ 亀山市文化会館					
1便	9:50	10:00	10:20	10:35 着	11:20 発	11:35	11:55
2便	11:55	12:05	12:25	12:40 着	13:30 発	13:45	14:05
3便	14:05	14:15	14:35	14:50 着	15:40 発	15:55	16:15

企画 ■ かめやま文化年実行委員会

「Cafe@ 亀山」 東町ふれあい広場 ⑩

会期中の土曜、日曜、祝日開催

11:00 ~ 無くなり次第終了

あいのや / アグアナボッカ / あんらく / 亀遊 /
こびりカラー / 小さなパン屋 teto / 猫窓ビザ
シャム猫亭 / ヒメシヤラ / もぐらや / ヤギカラー /
beckcoffee / CJ / CAFÉ Nekko / fragaria farm /
SWITCH BACK / very vegy / yon yon

「亀山茶でおもてなし」

亀山市市民協働センターみらい ⑦

会期中の土曜、日曜、祝日開催

10:00 - 15:00

亀山市はお茶の名産地です。
日本茶インストラクターなどに
よる呈茶をいたします。
ぜひお召し上がりください。

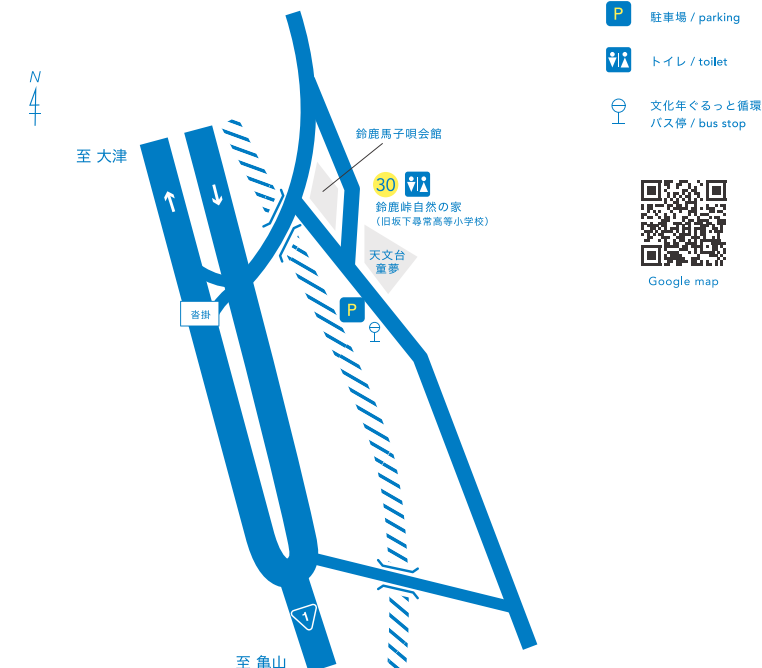
公式グッズの販売

しほりや・森本薬品 ⑦

- スタッフパーカー
- クリアファイル
- 亀山トリエンナーレ羊羹 ○ 生甘堂謹製
- アクセサリー ○ 小倉咲穂 制作

坂下エリア

Sakashita Area



寺院 / temple

神社 / shrine

駐車場 / parking

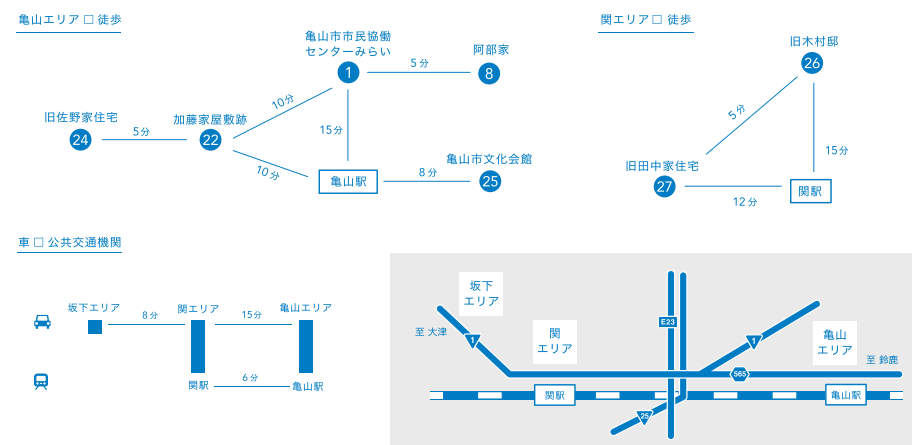
トイレ / toilet

文化年ぐるっと循環
バス停 / bus stop



Google map

亀山トリエンナーレの歩き方 * 所要時間は目安です





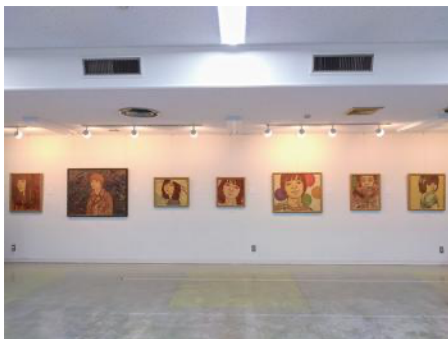
東町商店街

展示作品

Higashimachi Shotengai



龍山トリエンナーレ
2024



岡本ヨシヒロ

君に会いにゆこう

「描かれた人物(作品)が誰か(鑑賞者)に出会う」という意味で【君に会いにゆこう】というタイトルをつけました。

多くの方々に作品をご覧いただき、亀山トリエンナーレにかかわることができて本当に良かったです。



あまのしんたろう

かめやましな 10かいあるく

亀山を歩き回って撮った写真に"見立て"や"謎かけ"のタイトルを付けた作品。鑑賞者に日常に潜むオモシロを示すことで、今後その存在を意識してもらえるよう試みた。商店街の屋外シャッターという気軽に鑑賞できる環境もこの作品にとって良かった。



アトリエ美園

ワークショップ

紙版画 / 伊藤明淑

アルミホイルアート / カノシオニ

紙版画とアルミホイルアートは手軽にできるのが魅力です、全てのひとが親しみ楽しんでいただけるよう広めていきたいです。



森本紗月

巡りめぐってまたここで 会いましょう

私たちの魂が様々な生きものとして、様々な生き方を経てまた巡り会えたらそれはやっぱり運命だと思うのです。それは人に対してだけではなく場所や景色にも懐かしさや居心地の良さを感じたりすることでしょう。



園田源二郎

「 生きている 」

「たましいの交歓ときにリズムもて」
生きて在ること。在ることの尊さを。そのよろこびを。また、かなしみも。
すべてを抱擁するような場をつくりたいと思いました。
ご来場くださったみなさま、今回かわってくださったすべてのみなさまに感謝いたします。
ありがとうございました。また、どこかで。



藤田昌久

東西南北

今回、法因寺を題材とした版木と版画を展示しました。普段は静かな境内にたくさんの方が訪れ、実際の法因寺と作品となった法因寺を見ていただきました。



カノシオニ

「Fusion」

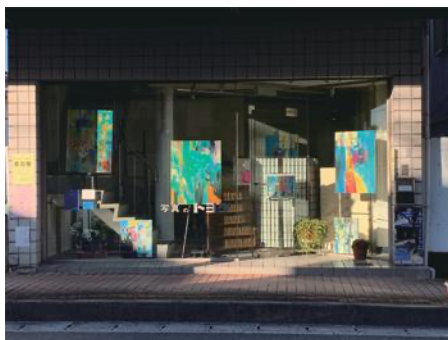
今回の展示は「融合、一体化」という意味で「Fusion」とタイトルをつけました。展示場所であるプランタンさかきやさんに、自分の作品という異物が登場することから、「異なる価値を持つもののどうしの共生」というメッセージの発信を目指しました。



伊藤亜優子

鼓動の森

今も、この時の夢は鮮明に覚えている。寝る間際まで、自分の不安と戦っていた。そして、この生き物と妖精、森の中での命の鼓動が聞こえた。暖かい命と、ぞくぞくするような面白さを感じた。この夢から目覚めた私は筆をとり、1週間程で描き上げた。私の中の何かが顔を出した瞬間だった。



倉岡としえ

memory

写真のトヨダさんでの展示は、今回で2回目でした。前回2014年には、今は亡き店主の豊田さんが受付に座る絵も展示しました。今回はその絵も含めて、たくさんの思い出や記憶の詰まる元写真館の空間に「memory」のテーマで数点の絵を展示させていただきました。



小野結彩

祝祭

阿部家の独創的な雰囲気に、自分の作品が溶け込むような感覚で、思い描いていた以上の世界観を表現することが出来ました。ありがとうございました。



的場乃莉華

ニノリカラフルニ

「おそ松くん」が大好きな彼女の作品には、スピード感溢れる筆致で無数に「おそ松くん」が描かれています。表情豊かなおそ松くんを見つけるのも一つの楽しみです。的場さんの作品を通じてアールブリュットに触れていただけに感謝します。(支援者より)



川原田洋子

Kameyama people #01

前回のトリエンナーレ開催時に阿部さんのことを知りました。その空間と阿部さんの存在に惹かれ、何か形に残したいと思い立ち今回の作品ができました。亀山の町を歩くと写真に収めたい風景に出会います。



中林晴香

chapter 2

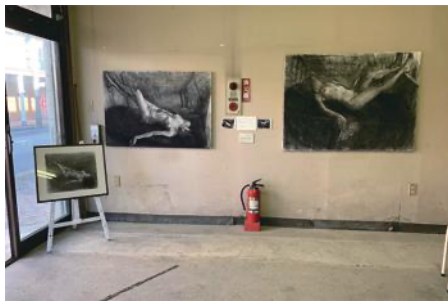
阿部家で役目を終え物置で眠っているバケツを見つけました。6つの青いプラスチックバケツの存在に惹かれて、作品として再び見てもらいたいなと感じました。植木鉢は植物を支える母体のような役割であり、バケツに有機物を合わせることで物質としての生っぽさを表現しました。



計良明子

The Konjac Maker 2024

かつて繁盛していた人気店だったという中村こんにやく製造所を私なりに現代に蘇らせようとした。他の場所で集めた物や写真などを用いてドローイングすることで亀山と世界を繋ぎ、プラ容器でゴミ問題を提起したかった。



倉岡雅

アトリエの風

私は常に対象物と対峙して描いている。今回はかめやま文化年2024特別企画として旧坂下尋常高等学校校内に大作(F200号2点)を展示する機会を得た。阿部家ではその大作の下絵(エスキース)を中心に展示した。



寺本美穂

たゆむまち 黄色い額縁

かつて、こんにやくを運ぶために使われていた黄色いコンテナ。私が撮った何気ない少しゆるんとした町の写真。そこに確かに存在していたお店の記憶とコンテナの底で待っていてくれたコンニャクのいとおちゃんと共に。楽しく過ごしてくれたんじゃないかな？



荻野良樹

山神

山神信仰についての聞き書きと、それが祀られている地域の風景。「春になると山から下りて田の神になる」と言われる山神。平野部で行われている山神信仰と風景の関係性を考察する。



ピカソ・スイッチ

妖精迷宮 -フェアリーラビリンス-

妖精の扉をモチーフとして不思議な世界に迷い込みその世界を覗きみる…子どもも大人も小さな扉があればその向こうに何があるのか知りたくなるはず。そんな作品がいつも遊んでいる、いつも見ている場所に突然現れたら…子ども達が遊ぶいつもの公園がアート作品によって非日常になることでイマジネーションの大きな種になるよう”妖精迷宮”としての空間を制作した。

*この作品は「実行委員が選ぶ亀山トリエンナーレ賞」に選出されました。



土方英俊

WATCH DOG

東町商店街のしばりやさんの看板犬ムックに着想を得て、小林時計店のショーウィンドウに犬の立体作品を展示しました。タイトルのWATCH DOGは番犬という意味で、時計のWATCHとのダブルミーニングになっています。



森敏子

「の・よう・な・もの」 「風のおと」

商店街の路地の奥にある昭和の初めに建てられた古民家。
家の外枠に並べて吊られている掃除道具たちにイタズラ心が湧いた。
古民家の古い窓ガラスは風が吹くとガタガタと鳴っていた。



KAO'RU Shibahara

-柴原 薫-

「峠を越え東西に旅する者たち、
我らと対話し、その心の内を見せよ。」

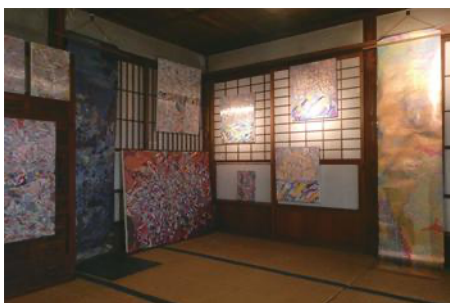
鈴鹿峠を望み、日本の東と西をつなぐ亀山は、城下町・宿場町として古より重要な拠点となってきた。それは、日本の神々や精霊たちにとっても同じことが言える。
日々、亀山宿にて、人々・精霊の移動を見つめ、宿場を守る精霊達を表現した。



伊藤明淑

生きる

シルクスクリーン(版画)で表現をしています。人間の揺らぎの世界を表現しています。今回はすべて麻の素材ですが、コーヒー袋を使用しており、使い終わったものにもう一度命を吹き込む。「生きる」を繰り返す。



SIM_Moby

SIM_Purgatory (亀山の煉獄)

2024年に参加した展示キャリアの中で最高の経験、亀山トリエンナーレ! 今回の展示を通じて、多くの新しい観覧客と作家に会うことができて本当に良い経験でした!
私は天国と地獄の中間世界 煉獄 世界観作品を準備し、亀山の風景や天気、光にインスピレーションを得た抽象コラージュ作品をメインに準備しました。亀山市内が全部見える素敵な景色の古民家で、光によって屈折して色が変わる煉獄作品を皆さんにお見せできてとても嬉しかったです。
亀山トリエンナーレ、ファイティング!



展示作品

Nishimachi / Meiji Tenna Anzaisho

西町・明治天皇行在所



西町・明治天皇行在所
2024



長縄功太郎

「深緑」

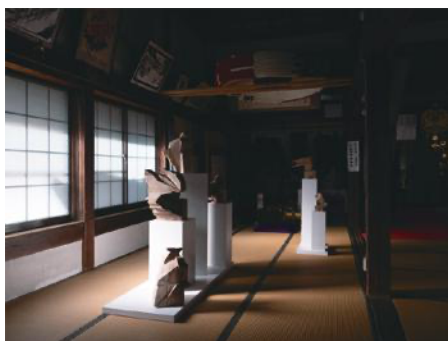
平安時代をイメージして和紙や平安時代の書家の筆跡を貼り込めた上にドローイングをした16点の作品を並べ、絵巻物のように展示した。街行く人はどう感じてもらったのかなあ？紙の重なりや色の滲み・・・



堂本清文

“創・遊・空・玄”

職人の技による様々な造形作品が溢れる亀山。懐かしい宿場町を想像して制作しました。



里村英昭

abstract birds

遍照寺の本堂に差し込む光、静かな空間。時々、鳥たちの声が聞こえてきます。仏教では創造された鳥たちが登場します。古くから人は鳥たちに様々な想像を巡らせてきました。楠木を素材に彫り込んだ抽象的な鳥たち。それらの彫刻で空間を構成しました。



momo / 植村胡桃

ある満月の夜に

岡田屋本店のワインセラーを舞台にして、ワインの世界をインスタレーションで表現しました。多くの方々が作品に触れ、ワインへの興味を深めていただけたことを嬉しく思います。在廊期間中は亀山の街や人々のあたたかさに、私自身も癒していただきました。



田島悠史

fogforests

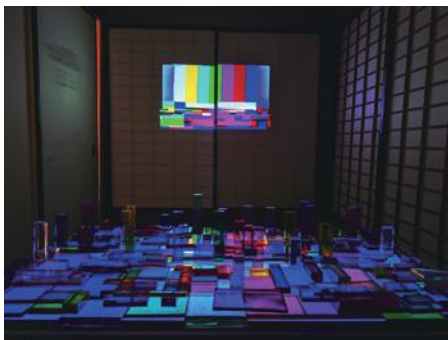
『fogforests』は「霧がかった森(山)」を撮影し、動画AIツールで生成した映像作品です。現実に基づいて生成した映像は「ありそうだが実在しない世界」を示します。中央には祈祷の時の炎から着想を得た光の柱を加えています。なお、本映像はNFTアートとして「OpenSea」に出品しています。



鈴木良治

ニシノマル

庭園にあう作品にしたいと思い作りました。作品をもう少し大きく作ってみたいかったのですが、搬入を考えるとこのサイズかなと、なってしまいました。できればあと2体ほど並べた形にしたかったです。



大岡英介/Eisuke oooka

Information Error

メディアは真偽不明のプロパガンダに溢れ、テレビや新聞、SNSなどの情報は偏向報道と偽りを繰り返し、エラーの連続である。テストパターン映像にグリッチをレイヤー化しエポキシ樹脂を立体的に構築した映像作品。



服部奈奈

“「Inclusive Society」 ~もこびいとまおまおとみんなと~”

どのようなマイノリティの中であっても、ありのままのそのままで充分に素晴らしい存在なんだと、自分自身を誇ることができ、また、その存在を認め合える社会でありますように。



井谷うらん

秋ウララ／ちょっとここで一休み

去年の秋に行在所の庭に咲いていた彼岸花の赤い色が、レトロな建物と石垣に映え、とても美しかったので、赤い花をイメージした風車と小さなペットボトルを組み合わせて展示しました。
歩き疲れたら一休みしてもらえるように古いベンチを赤く塗って配置しました。



加藤家屋敷跡

展示作品

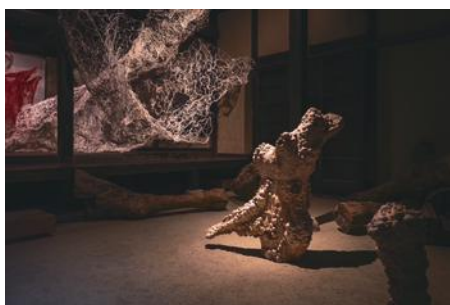
Kato-ke Yashikiato



宮寄祥子

亀山の生命

作品「亀山の生命」は、白糸と紅糸で命と歴史を表現しました。展示で頂いた多くの言葉や受賞は、私にとってかけがえのない財産です。この経験を糧に、新たな表現に挑み続けます。ありがとうございました。



黒宮亮介

今日も何処かで生まれてる

今回、歴史ある空間で展示できたことは大きな経験となりました。また地元でのトリエンナーレに参加させていただき、自身の活動の発表の場としても多くの方々に見てもらい良い機会となりました。時を越えて、生まれるカタチをこれからも彫り出していきます。



中村岳

遡及空間

ぼくは絵描きです。「三次元絵画」という考え方。ある時、野外で自由に空中に絵を描きたいと思いました。木材にアクリル絵の具を塗って絵筆の代わりに組み立てていくという方法でした。



Masaki Hagino - 萩野真輝

Le bocal de poisson soluble

- 溶ける魚の金魚鉢 -

この作品は、人間の脳と言語の関係性について、アンドレ・ブルトン(André Breton, 1896-1966)の著書『Poisson soluble』を引用し、考察を加えたものです。大豊和紙工業株式会社様から、三桎和紙の素材提供をいただき実現しました。

The box weaves history

- 歴史を紡ぐ箱 -

この作品は、人間の脳と、紡がれた歴史の関係性を考察したものです。文化・歴史は人間の経験、そしてその記憶を媒介して紡がれていることを表現しています。カメラマローン様からワックスの素材提供をいただいて制作しました。



Akiko Higuchi

all along

ずっと前からそこにあった。知る前と後では違う世界に見える。時を紡いできた大切な場所と作品双方が生かされるよう計画し、陶器約400個、植物や埴輪などのイメージで制作。加藤家の存在を知る前と後では違う世界があり、私にとって愛着のある場所へ変化した。



森正樹

削り合うトルソ

遠い異国の地で起こっている痛ましい戦争は、かつて美しく在った街を破壊し、焦土と化している。本作の中で寓意によって街を擬人化した2体の巨人は、暴力の応酬によってどこまで削り合い続けるのか。手も足も首もない、トルソになるまで続くのだろうか。



松岡歩未

Survive

この場所にかつて存在した家老の居宅。
食べて、寝て、働く。
この価値は今も昔も変わらない。



市川雄康

承

亀山トリエンナーレ開催の年は、能登半島を地震と水害が襲い悲惨な状況に心が痛んだ。この先の伝統や文化の継承を想った。江戸時代に起する加藤家屋敷も、紆余曲折して今に至る。この玄関から出入りした人々の継承を想った。この2つの「想い」を作品とした。



旧舘家住宅

展示作品

Kyu Tachi-ke Jutaku



伊賀上良太

Untitled 992-1090

亀山トリエンナーレ実行委員会の皆さま、
毎回お助けいただきありがとうございます。
実行委員の皆さまが作家であることが、一
作家としてとても心地よく、気兼ねなく毎回
展示させていただいております。ありがとう
ございます!!!



MOTU

おやまのつくりかた

展示空間の力強い土壁に対し、亀山から
見る山々は高さもなく空気や空に溶け込む
ような印象だった。山が山であるために何
が必要なのか。私は「祈り」「地層(時間)」「
水(田園または輪廻)」の3つのイメージそれ
ぞれを手遊びするかのように表現した。



伊藤龍彦

館家襖一双

ドネツクとかザボリージャって地名、あの不幸
な戦争がなければ知ることなかったろう。
Kameyamaも世界の中の知られざる地名
だけど、戦争でなく、artで知ってもらえる
なんて、なんてhappinessなことだろう。



Kim Youngsuk

よくつとめ はげみませうと
くるとくと 透明な人の
透明な声が

近年、現代の女性問題をテーマに創作してい
ましたが、今回の亀山でのリサーチ・制作を
通して、歴史の中の女性達の人生に出会い、
現代へと繋がる問題の根幹に気づけたよう
な気がします。
大きな学びと温かい出会いを糧に、また次の
創作に励みたいと思います。



枝光由嘉里

光と水
自然の力と人
無題

館家の与えられた展示空間に鍛えられ、作品
ができました。訪れたことがない空間に厳し
い展示条件がある中、どのように作品を設置
するかが考えるところでした。送られて来た
図面に、展開中の自分の作品を最終的に落
とし込むことができて良かったです。ありが
うございました。



小林園実

Unconditional Love
(無条件の愛)

昨年他界した引きこもりの弟のドローイング
などを印刷して紙風船に閉じ込め、離れの
茶室に展示しました。説明なしに、ただ作品
をにじり口越しに覗き込む事で彼の存在を
垣間見て頂き、現地では弟について語る
ことで私自身の癒しと昇華に繋がりました。



鈴木幸永

「未知なる人体」

五臓、六腑と脊柱管

五臓六腑とは伝統的中国医学用語です。
作品の後方は植物素材で染色による純度の高い明晰さがあります。
後方はガラス素材で痛痛しい脊柱管を透明度高く表現しています。



土井健史

Chain Wall in KAMEYAMA

旧東海道沿い旧館家住宅は、街道側は格子や塀で固く閉じられているが、各建屋と中庭は曖昧につながり豊かな空間をつくっている。ここに関係性を絶つかのように境界をつくる。境界により場所が持つ関係性や記憶を顕在化し、我々に境界の必要性を問いかける。



高氏奈津樹

菊と刀 in 亀山

菊と刀が日本の象徴として歴史的、文化人類学的に意味するもの、現代日本社会に生まれ育ち現在ニューヨークに住む私にとって非歴史的に意味するもの等が交錯する有意義な展示となりました。



山田なつみ

お江戸謳歌

家事育児仕事をしながら制作活動を行っており、例え一筆でも描く事を日々の目標としています。タスクを並行しての制作は思い通りにならない事も多いですが家族の理解もあり、子どもをきっかけに作品のアイディアも生まれ、今回の奨励賞に繋がったと感じています。



田中七星

願えば雨。願えば太陽。願えば風向。願えば言語生物。

浮紅葉がっくらって良い気分。鼻宿る夜の灯にも再会。関東北より静岡を東〜西120km、ぶっ放してやって来た。館家天井を見上げれば、満天七星の如く「我輩は犬である」；願えば雨。願えば太陽。願えば風向、、、速く吠えて、亀山宿を響き渡る。



Setsuko Nakashima Dameme

鴻

二体の巨人を帆布にMixedmedia(膠、墨、顔料。カラー・ジュアリ)で首から下のみを表現した。



白水口コ

月夜の仙ヶ岳

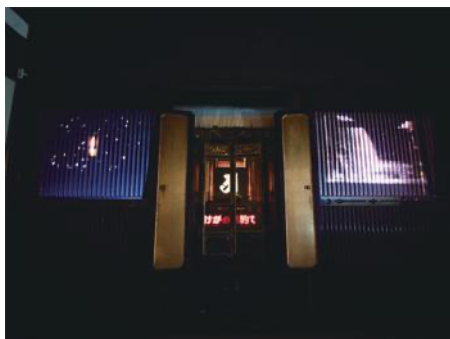
仙ヶ岳の山頂の岩場は、まるで山に住む精霊達が集っているようだ。満月の夜、月光に照らされた彼等は、神秘的な静けさに包まれている。私は、このお山に集う精霊達の情景を表現したいと思いました。そして、観客は、その集いに、自分も参加していることに気がつくでしょう。



原憲太郎

遠くを見るとということ

映像インスタレーション。遠くの山並みがスローモーションで映し出される。遠くを見ている時、人は「今この自分」でなく、「どこか遠くの誰か」を想い、優しくなれるのではないか。

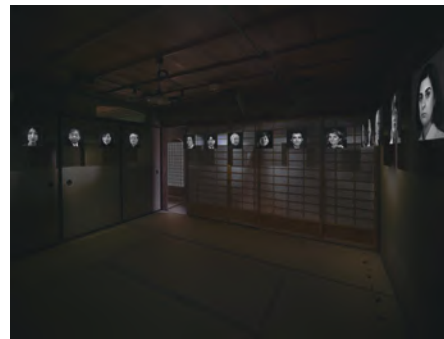


晶蔵 SHOZO

炎色曼荼羅

Fire Colored Mandala

亀山の特産品である蠟燭にちなみ、金剛界・胎蔵からなる両界曼荼羅を炎で表現することを企図。会場となった館家の仏間をお借りし、仏壇の両側に映像を投射、中央に大日如来を表す梵字(阿字)を掲示、瞑想を誘導する文言をサイネージで示した。



HRATCH ARBACH

N0 NAME

Hratch Arbach's installation for the Kameyama Triennial bridges Armenia and Japan through their collective memory. In one space, seven notebooks from his N0 NAME project count down 1.5 million Armenian Genocide victims, accompanied by pencil scratches and bilingual counting voices. Numbers also evoke Japan's atomic bomb victims. In the second space, portraits of Kameyama residents and the Armenian diaspora silently converse, symbolizing resilience and shared histories. The work fosters dialogue on memory, hope, and resilience.



旧佐野家住宅

展示作品

Kyu Sano-ke Jutaku



国立民族学博物館
2024



Etsuko Kato

「継承」シリーズより
「Memories」、「Leftovers'
War」そして「祈り」

作品を通して、少しでも戦争や平和について考えてもらえたのなら、ぜひそれを周りの人とシェアして欲しい。今度こそ「やり過ごし（なすがままにしておく）」にするのではなく、歴史を正しく学び、祖父達が守ってきた戦争のないこの平和を守りたい。



高北幸矢

破壊→再生＝保存

国内の多くの芸術祭を観て来ましたが、観ると参加するでは、大きな違いを感じました。また個展で創り上げることのできた自分の世界を完結することは、多くの発表条件の中で困難なものでした。大変勉強になりました。



オノ・ミチ・ヒロ

AROUND THE WORLD

屏風はすごい。なにしろ自立する。
「二曲一双屏風」風に絵を展示した。
屏風の隙間の向こうからもクマが覗いていたのだが、気がついてくれたかなあ。



亀山市文化会館

展示作品

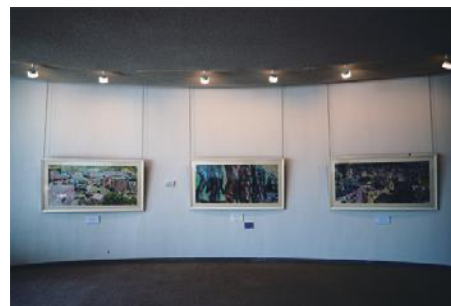
Kameyamashi Bunka Kaikan



浅野暢晴

無何有の音を聴く

陶の体を持つ三本足の生き物「トリックスター」をロビーのベンチに展示しました。彼らはホールから聞こえてくる音に耳を澄ましているようです。ベンチに空いた一席に沢山の方が座ってくれて、人間とトリックスターの交感で亀山で起きたことがとても嬉しいです。



田村公男

「亀山・カメヤマ・KAMEYAMA」

初回から亀山を描いた風景画を出展しています。スタンスを変えず現代アートの祭典に愚直なまでに「違和感」と「場違い感」のある具象絵画を展示しています。回を重ねる毎に、この違和感に満足を感じるようになってきました。



柴田恭宏

～REVIVE～ 亀山アリゲーター

300万年前、亀山に生息していたとされるワニをアート作品で復活させるということで制作しましたが、コンセプトを超えて老若男女問わず楽しんでもらえた作品となり、嬉しく思っています。



福重亘

ゆりかご

亀山の命の繁栄を願い、オオサンショウウオと卵が穏やかに育むイメージで作品制作。油彩で描いたオオサンショウウオの絵と、麻布にドローイングした卵の絵を植木や柱に巻きインスタレーションしました。



展示作品

Seki-juku

関宿



龍山トリエンナーレ
2024



浅野言朗

Wind Pavilion

3回目の参加となるが、いずれも糸が素材である。今回は初めて屋外の展示であり、糸を張った1m角のフレームを庭に敷き詰めた。隣接する旧木村邸の畳の間に延長されているようにも見え、糸は、時々刻々秋の光や風の状態を繊細に反映して、美しく妖しく輝く。



花澄

君恋し / Love for you

一歩踏み入れるとそこは時空を超えた別世界、恋する乙女の夢の世界へ、という想いで制作しました。田中家の持つ力もお借りし、うわぁキレイ…という声に包まれた空間でした。地元のボランティアのみなさまが作品に恋してくださって嬉しかったです。恋が叶いますように…



天野知亜紀

ココロの赴くままに

今作品のテーマを『童心』とした。ほんのひと時、鳴りを潜めてしまった好奇心や探求心を思い出させるようなキッカケを、スネアドラムを通じて仕掛けた。作品に近づけば映像と音が反応し、鑑賞者と呼応するような関係を築いた。



下村雄三

Another Garden

旧田中家の庭を鏡写に時間の経過と四季の移ろいを描いた作品



小畑亮平

Their Breathing

かつて人流・物流の重要な拠点であった東海道の宿場町。現在はそのすぐ側を主要な幹線道路がいくつも通り、今なお多くの人や物が往来している。行き交う人々の、誰かの行為の痕跡が残された物品からその形状だけを抽出し、それらの行為に宿る気配を探り出す。



野口翠蓮

水の記憶

現代美術が多くのファンを集めている現状をひしひしと感じました。

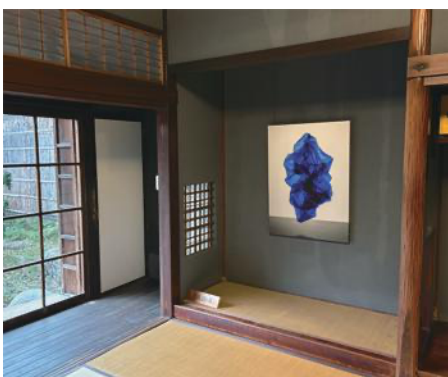
撮影〇Hiromu NARITA



HectorFalcon

Dynamic Transfer

"Dynamic Transfer" by Héctor Falcón arises from a playful experimentation with painting and the breaking of conventional formats, which gives the work a remarkable adaptability. This flexibility allows it to transform itself in each space, thus achieving a profound intervention in the environment. In addition, this piece establishes a dialogue with the contemporary global context, conceptually representing itself as an explosion that is more associated with creation than destruction.



OmarTorres

Emotions /Azul

Omar Torres' study of emotions and it is hard to claim another name for it but study, presents the audience with an opportunity to contemplate emotions as this separable, distinct part of the world rather than of our selves as a framework for his investigation.



撮影○Kenji Utsugi

Sato Sugamoto

Glimpse

Glimpseは、SNSが私たちの生理的状態に与える影響を調べる作品です。絡み合った電線で神経回路やデジタル回路を模し、瞬時に過剰な情報を受容する傾向を浮き彫りにします。丹念に作り込まれたこの作品は、デジタル世界との一瞬のやり取りに対立する視点を提示します。



Timo WRIGHT

“また聞こえてくるあの音たち I can hear it again”

この作品は、亀山、関に住んでいる方達に伺った「昔はよく聞こえていたが、最近では聞こえなくなってしまった音」の物語を聞くことで、「あ!そういう音あったよね!」、と記憶の奥底から浮上してくる情景や感情を感じることの出来るものとなっています。



WILLIAMNORTON

“When the Mountain Blesses the Rain”

"Acrylic and Imitation Gold Leaf on Police Riot Helmet on a 2" x 2" x 7" Plexiglass Base (Left Side) 18" x 12" x 10.5"

機動隊ヘルメットに金箔を使って描いた富士山とカラス。伝統的な建築に合う作品にしました。



Melinda McCoy

Élan Vital

The creative voice of ones innermost self, our driving life force that nurtures the soul's journey.

A series of styled portraits curated to explore the subjects core.



LILY JAZZ HOSOTANI / MEGUMI FUKUDA

“False Matrix”

The system that surrounds us attempts to insert ourselves within a bubble formed by linear forms. Lines in which shape modern frameworks, boundaries and sequences. Bordered from the life beyond us. The mark that keeps us secluded from our own histories and relations. How far are we from the parallels of this new apparatus of modernity?



CAKE HARA

『大切なものはいつも見えない』 / The crucial things are always invisible.

情報過多の世の中で、大切なものはいつも目で見えない。心を静め深呼吸をしても見たいものが見えない時に何をするのか。あなたは何をしましたか？
電力を使わず自然の恵みに頼った快晴時しか見えない作品。今回の会期中は曇りが多くわずか数日の数時間だけ現れました。



小寺諒

Unforgettable Times -Early 2020's

あれほど世間を騒がせた2020年のパンデミックも、今となっては遠い過去の出来事のように感じられます。
本作は、当時の社会的混乱を振り返ると同時に、平時の脆さや尊さについて再考することを目指したインスタレーション作品です。



Ryan Miller

Ghosts in the Glass, Windows That Whisper

(from the series : Hold Fast,
Don't Look Down)

In Ghosts in the Glass: Windows that Whisper, I explore creativity through the lens of shukuba-machi, vital waystations along the Tokaido highway. Like these sanctuaries offering travelers shelter and sustenance, my paper collages act as metaphorical resting places, reflecting my journey of reconciliation, healing, and personal growth.



山田風雅

『時と場所を超えてやってきたが、僕にはずいぶん新しいようだ』

歴史ある街並みを古代の生き物が眺めると新しいものばかりのようです。
現代を生きる私も、亀山を歩き各地の作品を通して、まだ気づいていなかった亀山の面白さを新発見できました。

旧落合家住宅に展示を予定していました Miranda Martinez は都合により展示不可となりました。



展示作品

Suzuka Toge Shizen no ie

鈴鹿峠自然の家



市川雄康

lines

木製の黒板とロッカー。凛とした白き土壁。
古き校舎に自分の教員44年間に重ね、5作を選んだ。
かつて教室に響いた坂下の子らの声に想いを馳せながら…。
巣立ちたる子らに幸多かれ。



オノ・ミチ・ヒロ

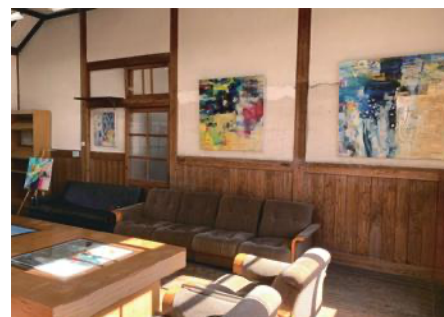
タベタリタベラレタリ

32畳の和室を全部使って展示できることになった。いろいろ考えて絵で迷路をつくることにした。こんな絵の楽しみ方もあっていいよね。



伊藤龍彦

夜景の光がアスファルトに反射したり、水鏡のインスタレーションをしたり、気がつくと僕はいつもリフレクトを扱ってる。
鑑賞者が作品に映り込んで完成する参加型絵画。坂下小の子ども達が時を超えて映り込む姿を想像していた。



倉岡 としえ

森の声

昔懐かしい、木造の校舎、数十年前の学び舎の記憶がよみがえってきます。
そして深い鈴鹿の森は、私の暮らす山里の空気と繋がり重なって創作のイメージを強く呼び起こすものとなりました。まさに「森の声」が聞こえるようでした。



井谷うらん

鎮魂 / No War !

世界のあちこちで未だ続いている紛争が、人々の住む街を砲撃などで破壊し、学校や病院まで標的にして、罪のない子どもや一般の人々が死の恐怖に晒され、命を犠牲にしている現状を目の当たりにすると、未来や夢を突然打ち砕かれた無念さが伝わってきます。



倉岡 雅

アトリエの風

私は対象物を見て描けば「真実味」が出ると信じて木炭と油彩で描写してきた。そして大作の展示はいつも壁面だったが、今回は初めて「衝立展示」にした。床に釘が打てない中、絵を台座に立てることに苦勞したが、日常空間とは異なる新鮮な風が吹いた。



田村 公男

風景

旅先で描いた数々の作品。
広い教室に展示でき良かったです。



藤田 昌久

旧坂下小学校界限

木造の校舎に合う木版画の展示方法を考え、自作のイーゼルと並行して今回の作品を制作しました。



堂本 清文

創遊空玄

山奥の霞に包まれた空間で、旅人が交流を深め様々な創造とアートが育まれる宿場町を想像して制作しました。



森 敏子

森を歩く

校長室だった部屋の窓から見える山脈。子どもたちの声が響いていただろう運動場の向こうに広がる森。深い森のなかに、かつて存在していた学校に想いを募らせる。



長縄 功太郎

小さな学び舎

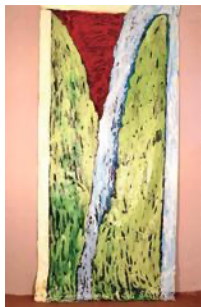
かつて子どもたちと教師が、共に学び遊んだ所。その渡り廊下に小さな小屋を設置した。多くの人が中に入って佇んでくれているのを見ることができた。今自分だけが一人になれる時間、空間も必要だ。



CAKE HARA

Stand clear of the closing door please.
閉まるドアにご注意ください

地下鉄のドアが定刻通りに閉まるように、非情なまでもドアは閉まっていく。もう閉じる瞬間がそこまで来ているのに、大切なものが見えない。おそらく閉まっても見えない。



WILLIAM NORTON

Waterfall

私の作品が100年近い歴史を持つ古い小学校に展示されることはとても光栄です。
亀山のみなさん、ありがとうございました。

関宿と鈴鹿峠自然の家の展示は「かめやま文化年2024」とのコラボ企画として開催しました。
鈴鹿峠自然の家の展示は「亀山トリエンナーレ」を立ち上げた実行委員を兼ねた作家メンバーによるものです。
WILLIAM NORTONさんは海外作家の紹介等で尽力されたことに感謝の意を表して招待しました。



記録写真

archive photograph



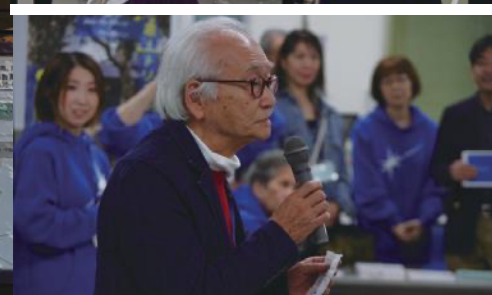
審査・現地説明会

2023.10.21

リサーチ

2023.10~2024.10





搬入・展示

2024.10.26

オープニングレセプション

2024.10.26





会期中の光景





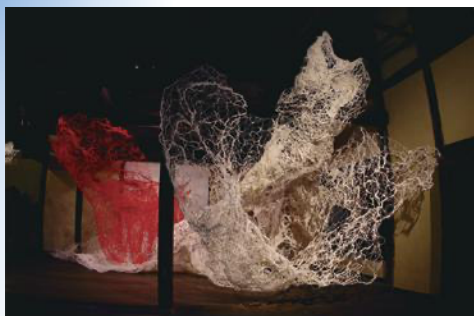
会期中の光景

表彰式・搬出

2024.11.16

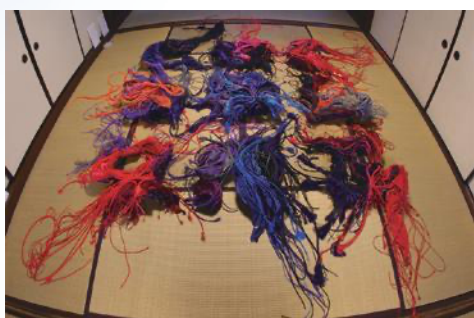


■ 亀山トリエンナーレ賞 Kameyama Triennale Prize ■



亀山の生命

宮寄祥子 *Sachiko Miyazaki*



Glimpse

Sato Sugamoto



「継承」シリーズより「Memories」、
「Leftovers' War」そして「祈り」

Etsuko Kato

亀山トリエンナーレ2024では、丁寧な作りこみに時間とエネルギーを投入した作品が印象に残った。ミース・ファン・デル・ローエが好んだ名言「神は細部に宿る」が頭をよぎる。こうした中、今回の受賞作は、「作家の登竜門」を目指す、亀山トリエンナーレの開催趣旨を前提として以下6名の作品を選出した。作品に共通しているのは瞬時に人の心をつかみ取るような力強さだった。インターネット社会の弊害や陥穽を表現した Sato Sugamoto のインスタレーション、戦争の犠牲者に照準を絞った Etsuko Kato の作品、アルメニアでの大虐殺が通奏低音のように流れている HRATCH ARBACH のインスタレーションは、作家の問題意識が反映されていて、注目された。一方、宮寄祥子と MOTU の作品は、展示場所である旧家の空間を最大限に生かした点が受賞に繋がった。山田なつみのポップな作風には時代を反映する豊かな感性が漲っていた。6名の今後の活躍を期待したい。

■ 亀山トリエンナーレ奨励賞 Kameyama Triennale Encouragement Prize ■



N0 NAME

HRATCH ARBACH



おやまのつくりかた

MOTU



お江戸謳歌

山田なつみ *Natsumi Yamada*

At the Kameyama Triennale 2024, works that stood out were those where time and energy had been meticulously dedicated to detailed craftsmanship. The famous quote "God is in the details," favored by Ludwig Mies van der Rohe, came to mind. With this in mind, six works were selected for awards, in line with the Kameyama Triennale's mission to serve as a "gateway to success for emerging artists." A common characteristic of the chosen works was their powerful ability to instantly capture the viewer's heart. Noteworthy pieces included an installation by Sato Sugamoto, which expressed the pitfalls and negative impacts of the internet age; Etsuko Kato's work, focused on the victims of war; and an installation by Hratch Arbach, underpinned by the theme of the Armenian genocide, which conveyed the artists' critical awareness of social issues. On the other hand, the works by Shoko Miyazaki and MOTU received awards for their maximized use of the space of the historical house in which they were displayed. Lastly, Natsumi Yamada's vibrant, pop-inspired work overflowed with a keen sensibility reflective of the times. We look forward to the continued success of these six artists.

監修者○井上隆邦 作品撮影○瀧本麻須美



イベント ワークショップ

Events, Workshop



亀山トリエンナーレ
2024

特別企画

建畠 哲 講演会

アートによる地域の活性化

○ 10月27日(日) 14:30 -16:00 進行 ● CAKE HARA

○ 亀山市中央コミュニティセンター

約150名の聴衆が建畠哲さんの講演に耳を傾けました。
講演の後、会場からの質問に丁寧に応えてくださいました。



建畠 哲 たてはた あきら

美術評論家、詩人。
埼玉県立近代美術館長。全国美術館会議会長。

1947年京都に生まれる。都立小石川高校卒。早稲田大学文学部卒。国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長、多摩美術大学学長などをへて現職。草間彌生美術館長、京都芸術センター館長を兼任。その間、コロンビア大学、カルフォルニア大学バークレー校の訪問研究員、ベネチア・ビエンナーレ日本コミッショナー、横浜トリエンナーレ、あいちトリエンナーレなどの芸術監督もつとめた。オーストラリア国家栄誉賞、文化庁創立50周年記念表彰。詩人としては歷程新鋭賞、高見順賞、萩原朔太郎賞を受賞。

event

藤原智也 × 森敏子 クロストーク

市民による自立的な芸術祭

～亀山トリエンナーレの足跡～

○ 11月10日(日) 13:30 -14:30 ○ 亀山市市民協働センター

公共圏を真に創出する芸術祭としての亀山トリエンナーレ

藤原智也(愛知県立大学 准教授)

芸術祭が日本の各地域で実施されるようになって、およそ四半世紀が経つ。その設立準備段階ではヨーロッパの芸術祭が参照され、その筆頭にドイツのドクメンタ(1955年開始)がある。ドクメンタの特徴は、運営中枢がアートや社会学などの専門家による有限会社として組織され、政官財界との距離を取った上で、政治・行政・経済についての批評空間=公共圏を創出してきた点にある。

しかしながら、日本の行政立の芸術祭は、自治体首長を筆頭に地域の政官財界の主要人物が運営組織の中枢に名を連ね、短期間の大規模化を狙って経済効果を優先させてきた点に特徴がある。その結果、芸術祭の運営において政治・行政・経済への批評空間を構成するのに必要な距離感を適切に設定できておらず、そのこと自体への反省的な自覚すら共有されていない。

亀山トリエンナーレはどうであろうか。地域の文化リーダーやアーティストが運営中枢を担い、長期間の育みを大切に芸術表現の自立を優先させてきた点に特徴がある。展示では、行政立芸術祭だと現代アートという縦割り行政的発想によって排除されてきた、団体展系の作家作品も配置され、多様な芸術の幅を経験することができる。それらで扱われるテーマには、都市開発によって失われつつある土地の記憶、かつての痛ましい戦争、いまだ温存される家父長制など、鑑賞者が長い時間軸の中で思考を深められる作品がある。

ドクメンタを牽引した現代アーティストのヨゼフ・ボイスは、市民がみなアーティストになり、社会を造形(彫刻)していくことが必要だと訴えた。その背後には、市民社会が起点となり、政治行政や市場経済の権威主義・封建主義を制御して民主主義を実現するという、近代社会への再帰的な理解がある。権威主義・封建主義によった芸術祭か、民主主義を体現する芸術祭か。今後の日本の芸術祭を分岐する選択肢が、亀山トリエンナーレによって示されている。



山椒は小粒でピリリと辛い ～亀山トリエンナーレの軌跡～

森 敏子(亀山トリエンナーレ事務局長)

亀山トリエンナーレ2024の期間中、幸いにも藤原智也先生(愛知県立大学 准教授)とクロストークの機会をいただきました。たくさんの方にご参加いただきありがとうございました。

藤原先生は2014年から亀山トリエンナーレを鑑賞してくださっています。

美術教育の研究と同時に海外への視察を頻繁に行い社会とアートの関わりや芸術祭について論文を書かれたり、講演をされたり、、、美術学会で先生がまだ20代の院生だった頃に知り合い、その鋭い洞察力に感服していました。

藤原先生は以前から「森さん、亀山トリエンナーレは素晴らしいです。」と言ってくださっていたのですが、そこまで誉めてくださる真意を理解できないでいました。

会期前に先生を亀山にお招きして講演会を開催し、やっと日本の芸術祭の中の「亀山」の特異性、自立性、民主性、公共性などを理解しました。

私たち実行委員はそのようなことをあまり意識することなく“良かれと思うことを柔軟に”やってきた結果、亀山トリエンナーレが現在のカタチになってきたように思っています。

芸術祭をやりたいという動機、これがまず純粋だったと自負しています。

寂しくなっていく商店街をアートで賑わいを取り戻したい。

亀山の良いところを多くの人に知ってもらいたい。亀山の歴史文化を伝えたい。

新人作家に発表の場を提供したい。海外からも作家が参加してくれたら素敵だなあ。

アートシーンで登竜門という位置づけになればいいな。

街の人たちが自分の街に誇りを持って、もっと亀山を好きになって欲しい。

若い作家や住民たちと交流し街の未来を語りたいな。

行政と一緒に「アートの街亀山」を目指せたら嬉しいな。

そんな気持ちを繰り返しながら2024年まで突っ走ってきたというのが私の素直な感想です。

クロストークでは2007年から現在までの亀山トリエンナーレの軌跡を話しました。懐かしい人、光景などを画像で観て、積み上げてきた歴史と物語をあらためて実感しました。

亀山で展示してくださった多くのアーティストの皆さん、街の人たち、ボランティアさん、行政の皆さん、実行委員の皆さん、、、私はなんて幸せな時間を皆さまと共有してきたのだろうと、このクロストークで感じることができました。

藤原先生は亀山トリエンナーレを「民主主義を体現する芸術祭」とまで言ってくださっています。

「山椒は小粒でピリリと辛い」亀山トリエンナーレが、そんな唯一無二の芸術祭になっていけるようみんなで楽しみながら努力したいと思います。



私は常滑で造形(陶芸)活動をしなが、街でのアート関係の企画に携わっています。

初めて亀山を訪れた印象はごく普通の中規模の街だという感じでした。しかし、巡ってみると幾多のアート作品とともに街の地形やそこに住む人々が見え始め、その文化、歴史をひもとくことになり、いつしか作品を楽しむと同時に亀山の街そのものを楽しんでいる私がいきました。これが、亀山トリエンナーレだと理解し満足、感謝しております。

今回、文化芸術が街の未来に対して出来ることの確認を改めてさせていただきました。

佐藤千恵(愛知県立常滑高校 講師)

加藤櫻子(愛知県立大学教育福祉学部 2年生)



過去3回足を運び、亀山の情緒ある街並の中に溶け込む作品を観ていたが、今回愛知県大の藤原智也先生のゼミに参加して巡ったことで、今まで見過ごしていた現代アートや地域芸術祭の意義への理解が深まった。行政主体の大規模芸術祭ではタブーとされている戦争・差別・ジェンダーなどをテーマにしたものや、権力に立ち向かうコンセプトを持つ作品が展示されていることも意義深い。街おこしから始まり、地域の方々の熱い想いにより世界で活躍するアーティストの作品が集まる芸術祭へと進化を続ける亀山トリエンナーレの今後が楽しみである。

現代美術に関心があり、書店で雑誌が並ぶたびに各地の芸術祭をめぐるのが大好きだ。「地域再生」や「町おこし」など、芸術祭がもたらす莫大な経済効果は耳にしていたが、そのような裏側の事実を今回の亀山トリエンナーレを通して学ぶことができた。「市民による市民のための芸術祭」がいかに尊いものであるか、地域の想いにふれ、亀山の魅力を深く感じることができたように思う。見栄えや出来栄ばかりを気にする造形教育に一石を投じる現代美術の役割は大きい。今後も芸術祭や現代美術を学校現場の視点からとらえていきたい。

増田禎秀(ドルトンスクール名古屋 アート専任講師)

竹谷摩維子(奈良市立明治小学校 教諭)

event

HRATCH ARBACH × EISUKE OOOKA

N0 NAME sound performance

- 10月27日(日) 18:30 -19:15
- 亀山市中央コミュニティセンター

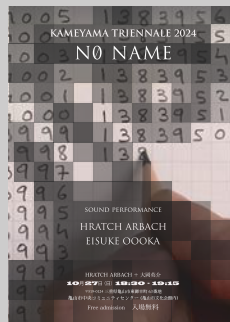
The sound performance "N0 NAME" unfolded as a multi-layered dialogue, where the scratching of Hratch Arbach's pencil echoed the solemn count of one and a half million Armenian lives lost, each number a fragile breath in the silent expanse of time. This rhythmic act of remembrance intertwined with the improvisational melodies of Eisuke Oooka, who layered his sound across multiple instruments, and experimental sound effect, their voices and poetry recited by Toshiko Mori and Lilly Okamoto adding further depth. Together, they created an intimate and emotional atmosphere, shared by an audience of seventy, each person bound by the gravity of the moment.

In an additional layer of resonance, Hratch Arbach added his own improvisations, his voice weaving between Armenian and Arabic songs, carrying the weight of memories from his childhood days in Damascus.

A profound, almost sacred atmosphere enveloped the room, shared by seventy souls, each held in the emotional gravity of the moment. As the performance drew to a close, the audience was invited to receive a small paper roll, a tactile fragment of the experience. One side bore the numbers written during the performance; the other side carried poetry of Roupen Sevag and Kurihara Sadako's words, suspended between Armenian and Japanese, like whispered echoes of resilience and hope.



HRATCH ARBACH



HRATCHと初めて会ったのは彼の展示用の撮影に協力した時だった。

彼はNYを拠点とする学際的なアーティストでアルメニア人とシリア人の両親のもとダマスカスで生まれ、そしてパリで微生物学の博士号習得後、美術を学び、現在はNYで写真家としても活躍する異色の経歴を持つアーティストである。

2015年以来、数字を書き続けるという静かな追悼行為で戦争や虐殺の犠牲者の人生を「N0 NAME」としてカウントダウンしてきた。

1915年、アルメリアでは150万人が虐殺された歴史がある。

彼が語る歴史の継承は、戦争の犠牲者を追悼するテーマを含む強いメッセージ性を持つ。それは医療に関わる私にも共通している。

私は幼少期、叔母から戦争体験をよく聞いて育ち、広島、長崎、そして反戦をテーマに音楽活動してきた。現在も世界の矛盾した歴史を追求しながら作品に投影させている。

特にHRATCHがコンセプトにしているResilience(レジリエンス)は、日本の戦後や災害の復興や平和の祈りと重なり、私の作品コンセプトと共通している。

戦争の犠牲者を数える数字は普遍的な言語となり、戦争犠牲者の日本人と、その集団的トラウマの記憶を呼び起こしている。

共有された歴史的経験における回復力と活力の象徴は、被害に遭った我々が世界の平和を祈る壮大なエネルギーとなっている。

今回、彼とコンセプトを共有し、亀山トリエンナーレ2024でライブパフォーマンスを行なった。日本とアルメニアの二つの国の集合的な記憶の交換と共有を促進し、2024年10月27日、亀山市文化会館で「N0 NAME sound performance」を実現することが叶った。このパフォーマンスはHRATCHがNYやパリの教会で開催したものである。

HRATCHの「N0 NAME sound performance」は祈りと共に音や香りが加わりながら、非常に神聖で平和的なパフォーマンスを行なっている。亀山トリエンナーレ2024でのHRATCHが描くパフォーマンスの物語は、彼が懸命に書き続ける鉛筆の音が会場に響き、亡くなった人々への祈りと鼓動が伝わった。私はそれらの振動に影響を受けながら楽器を奏でた。後半は森敏子さんとリリー・オカモトさんがルーベン・セヴァグと栗原貞子の詩を朗読した。

最後にHRATCHはピエール・フランソワ・レトゥエの詩が書かれた小さな紙のロールを観客に配布した。そのロールにはルーベン・セヴァグと栗原貞子の詩が書かれ、赤い糸で固く結ばれていた。「私たちはここにいます。私たちは到着します。とても印象的です。私たちの花崗岩の希望の印で消えた無名に声を与えるために。」ルーベン・セヴァグ

このパフォーマンスは映像と音を通じて感情や記憶を呼び起こすものではないのでしょうか。HRATCHの作品には、日本語とアルメニア語でのカウントダウンや肖像写真の展示など、歴史的悲劇と継承、現代の生命をつなぐ要素が含まれている。そしてサウンドパフォーマンスにて音の連なりやリズムが、過去の犠牲者への追悼と現在の生きる力の対比を表現されていた。

「聴覚を通じた歴史体験」を感じていただけた。

亀山の街に響く音がアートの枠を超えて心に残ったのではないだろうか。

EISUKE OOOKA

N0 NAMEのサイトを引用
<https://hratcharbach.com/N0-NAME>



加藤和也 × 天野知亜紀 サックス × スピーカーによる立体音響

- 11月2日(土) 15:30~
- 旧木村邸



サクソフォーン演奏とアコースモニウム(複数のスピーカーを用いた多次元立体音響装置)による、ライブ・エレクトロニクスの公演が行われた。曲目は、印象派のクラシックや現代、自作など様々なジャンルでの構成された。加藤氏の多彩な表情を持つ圧巻のパフォーマンスが会場を包囲するスピーカーによりデジタルテクノロジーとの融合により拡張され、全方位から音の波に包み込まれるような空間であった。

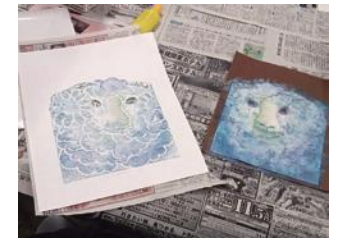
天野知亜紀



アトリエ美園

- 11月2日(土)
- 亀山市市民協働センターみらい

- 紙版画
- アルミホイルアート



ピカソスイッチ

- 11月4日(月・祝)
- 亀山市市民協働センターみらい
- 「妖精の扉」をつくりましょう
- 妖精そうちで妖精体験





Cafe@ 亀山

○会期中の土曜、日曜、祝日開催

○東町ふれあい広場

あいのや / アグアナボッカ / あんらく / 亀遊 / こびらカレー /
小さなパン屋 teto / 猫窯ピザ シャム猫亭 / ヒメシヤラ /
もぐらや / ヤギカリー / beckcoffee / CJ / CAFÉ Nekko /
fragaria farm / SWITCH BACK / very vegey / yon yon



魔女のお茶会

亀山茶でおもてなし

○会期中の土曜、日曜、祝日開催

○亀山市市民協働センターみらい



亀山トリエンナーレに寄せて

contribution



ボランティアとして参加した亀山トリエンナーレ2024

2022年はアート好きの友人に誘われて観覧しました。その時に作品だけでなく、面白いものがある亀山の街にも刺激を受け、何かしら関われないかと思ったのが、今回のボランティアのきっかけです。

普段から写真撮影を趣味としているので、募集に「写真撮れます」と添えて連絡しました。「今回は写真撮影担当」ということでボランティアとして参加しました。

撮影は、10月26日の搬入から最終日の搬出まで、延べ5日間でした。搬入日はお借りした腕章を頼りに作家さん・ボランティアさん・実行委員さんに声を掛けながらの撮影でした。作家さんからは「作業に夢中で記録を残せないから写真がほしい」という、嬉しい声が複数ありました。

会期中には『作品と街と人』をイメージしながら撮影しつつ、ワークショップやクロストークの記録もしました。この頃からはメンバーのみなさんや街の人たちとお話ししながら楽しく撮れるようになりました。

そして、最終日は表彰式と搬出の様子を撮影しましたが、涙雨の中、搬出作業はあっという間で少ししか撮れなかったのが残念でした。

今回の活動が、記録誌の作成と次回以降の開催準備のお役に立てると嬉しいです。

ボランティア / 和田浩典



三年後も楽しみ

亀山は面白いところだなあと思う。閉塞感がありながら、意外にも多様性を受け止める土台はあるように感じている。何年か前、「亀山トリエンナーレ」が開催されていることに気づいた。「アート」になじみはなかったけれど、商店街のシャッターが下りている空き店舗にも施された「アート」を見ては心が躍った。実行委員、出展者、ボランティア、見学者が混じり合い皆で楽しんでた。そこにはおおらかさがあり、私も何か関わりたいと思うようになっていた。そして今回はボランティアと、点てだしの茶席を設けさせてもらった。見学者でいるよりも皆さんとたくさんお話することができ、とても楽しい時間を過ごせた。三年に一度というもののいいなあと思う。日本茶のふるまいに参加していた亀山高校の生徒さんに三年後の夢を聞いた。三年後、やりたいことがある。三年後は未来だ、未来を語ることは希望だ。次回は是非ボランティアとして元気に参加したいと思う。

ボランティア / 廣田愛

.....

楽しかったボランティア

亀山市のいたるところにインスタレーションを活かしたアート作品があり面白かったです。雨の日が少なく、観て巡りやすかったです。今回は関や坂下にも展示作品があり、少し離れていると思いましたが、そちらも作品数や大作が多く、観応えがありました。観るだけではなく、応援するためにボランティアとしても、参加させていただきました。搬入の際は、のぼりを組み立てたり配置をしました。臨機応変にできて良かったと思います。メイン会場の館家の受付では、最初は不慣れなため、分からないことやどこに何があるか等、戸惑うこともありましたが、ノートに基本的なことは書いてあり、それでも分からないことや不足しているものがあれば、電話で聞けやすかったので良かったです。一緒にいたボランティアの方とも協力し合うことで、大きなトラブルもなく楽しくできました。

ボランティア / 儀賀一成

亀山トリエンナーレに関わった喜び

亀山トリエンナーレ2024にボランティアとして関わらせていただき、全ての展示場を鑑賞できて、とても満足です。

2年前のトリエンナーレでは、亀山の知人と各所を回り「街中がアートになっている」と感動しました。そして、このイベントにもっと深く関わりたいと思って応募させていただきました。旧館家の受付の担当でしたが、県外からの団体の方々や、泊まりがけの美大生もいらっしゃいました。私が担当した祭日は120名程の方が来館され、旧館家は大賑わいでした。中でも小学生のグループは動く仕掛けになっている作品に心ときめいたようです。子どもの頃からこんなに沢山の芸術に触れられて、本当に羨ましいと思いました。

今年は「亀山文化年」ということで、その名にふさわしい壮大なイベントであったと思います。

亀山トリエンナーレがずっと続いていきますよう願っています。

ボランティア / 川北いくみ

関宿旧田中家での豊かな時間

今回の亀山トリエンナーレ2024の展示会場が関宿、坂下まで拡大されたことは私たち地元の住民にとって、とても嬉しいことでした。

会期中、関宿旧田中家にて関宿に住んでいる有志数名で会場の受付、見廻り、案内等のボランティアをさせていただきました。旧田中家は長い期間、補修中でしたが亀山トリエンナーレ2024が市の文化財として最初の公開の機会になりました。段差の多い古い建造物ですので、来場者の安全に配慮しながらご案内しました。由緒ある旧家の空間と現代アートのコラボを楽しんでいただけたと思います。開催期間中、好天に恵まれ2,100名の方に来場いただきました。出展されたアーティストの皆さまや多くの来場者の方たちが「良い町ですね」と関宿の良さを感じていただけたことが幸せでした。

現代アートと歴史ある町並みが見事に融和した亀山トリエンナーレ2024。

ボランティアとして参加して豊かな時間を過ごすことができました。

実行委員の皆さま、亀山市の職員の皆さま、おつかれさまでした。

関宿旧田中家ボランティア一同



偶然に出会った記事から～亀山へ

1945年の亀山列車銃撃事件の記事をWebで知ったことから、亀山という地名を知り、偶然にもNYのアメリカ人の友人が送付してくれたトリエンナーレの応募要項が始まりでした。偶然に出会ったあの記事から、導かれたようにわたしは亀山にやってきました。

亀山トリエンナーレでは、本当に多くの方々との出会い、お話をさせていただきました。そして、鑑賞者からは、世界大戦当時の両親や祖父母の経験談を共有していただきました。これは、わたしが伺ったわけではなく、鑑賞者の方から静かに、そして徐々に話され始めることが多かったのがとても印象的でした。また、後日メールを送っていただいたり、直接会えなかったからと再度会場を訪れていただいて、お会いした方もいらっしゃいました。とてもありがたく思います。

祖父母たちの沈黙が、その子どもや孫たちの代まで広がっていたのだと肌で感じた初めての瞬間でもありました。亀山トリエンナーレでこの作品を発表しなければ、わたしはただ想像し考察するだけで、ここまで多くの事を肌で感じることは無かったでしょう。この経験は、母国である日本で作品を展示するだけでなく、作家と鑑賞者がそれぞれの想いを感じ取り、そこから始まる作品との対話、作家としての多くの気づき、そして学びを得ることの出来た場でもありました。

亀山トリエンナーレで生まれた会話から、わたしはまた導かれていき、帰国前に藤田嗣治の「アツツ島玉砕」、鏗光の「眼のある風景」という戦争画と対面することもできました。不思議な縁にゆっくりと、どこかへ導かれているように思います。

出展作家 / Etsuko Kato

文化の宿場町

「世界の亀山」。かつて両親宅のテレビに貼られていた文言です。

亀山と聞いて工場を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。しかし実際に訪れてみるとそのたたずまいにはまったく別の印象があります。

宿場の面影を残す静かで神秘的な街並み。そして明るく人見知りしない人々。

「場の力をいかして」とは監修の井上さんやキュレーターのHaraさんらが繰り返し述べていたのですが、制作にあたって大いにそれを感じました。

歴史的に積み重ねられてきた風土、土地や建物に漂う「気」のようなもの、そしてなによりもそれらを継承し、生活している人々。

アートはこれらを結び付け、明るみに引き出し、広げ、外からアーティストや客人を呼び込む、いわば目に見えない文化の街道の宿場町に亀山を生まれ変わらせているのです。

最終日、自分の作品の前に長々とたたずんでいらしたお客さまから、たいへん感動しました、と告げられて私自身も感動しました。

アートを通じてここには新しい「場」が開けている、そう確信します。そして「世界の亀山」がアートの代名詞になっていく、そんな未来を想像しています。

出展作家 / 晶蔵

開幕前日からの参加を体験して

日頃より、科学技術や思想、規範、芸術といったいろいろな事柄を学ぶ中で、何か一つでも新たな価値を創出していきたいと考えています。最近では、nakabanさん(画家)やtupera tuperaさん(クリエイティブユニット)、日本デザインセンターの方々と協同制作を重ねながら、アートやデザインの捉え方や考え方について思案しているところです。このような折に、亀山トリエンナーレ2024を体験できたことを大変ありがたく思っています。

また今回は、トリエンナーレの開幕前日から参加することが叶い、事務局や参加アーティストの方々と意見交換を深める貴重な機会に恵まれました。開幕前ということで、自らもまるで主催者や展示者のような空気を身にまといながら、アート作品の制作過程や展示方法、亀山トリエンナーレに対する想いや情熱、さらにはアート作品やアーティスト、そしてアートについての考えや語りを尋ね歩きました。とりわけ、アーティストから伺った制作過程における苦悩や、作品完成時に感じる「ピタッ」とした瞬間の認識、作品の輸送上の工夫、会場での展示方法の練り直し、さらには、ふと他の作品と向き合った際の共感などは、舞台裏の奥深さを知る貴重な契機となりました。

開幕日になると、雰囲気は一変しました。さまざまな緊張感や刺激、期待が交錯し、「ワクワクする場」が立ち現れていました。人と自然、アート作品といった関係にとどまらず、地域や歴史、文化などが共鳴し合う魅力的で活気ある空間です。何よりも、このような環境に身を置いたことで、私の中で「文化」という言葉の意味が大きく変わりました。文化というのは、巨大で捉えがたい何かではなく、もっと身近にある、その場その瞬間ごとにキラッと輝く星のかけらのようなものの集まりなのではないかと、捉え直すようになりました。

振り返って所感を述べるにあたり、芸術祭はなぜ必要なのかという基本的な問いが浮かび上がりました。この問いに対しては十人十色の答えがありそうですが、現時点での私の回答は、「周囲の心を温めつつ、つなげ、日々の喜びを共に享受するため」です。

近年、芸術祭に注目が集まっている背景には、このような「心の豊かさ」への切望があるのではないのでしょうか。地域に根差し発展してきた「亀山トリエンナーレ」には、まさに心の豊かさを創出し続ける希望が溢れているように感じます。

京都大学IPS細胞研究所 上廣倫理研究部門 特定准教授 / 三成寿作



亀山トリエンナーレは理想形の構築をしている

亀山トリエンナーレの創成期から関わり17年が経ちました。そのすべての年にドラマがあり、忘れる事のできない歴史の日々です。中でも今回の亀山トリエンナーレ2024の充実ぶりは格別です。旧坂下小学校の特別展示は、亀山トリエンナーレの特徴をよく表現しています。この企画展に展示させていただけたことに感謝感激です。三重県を起点に活躍するアーティストが、この実行委員としてドッシリ鎮座し、人間的絆や地域との関係性も大切にしてきた17年間の歴史の素晴らしさに乾杯です。

意外ですが、日本全国の各地方都市において、亀山トリエンナーレのようにアーティスト自らが協調しあい、切磋琢磨しながら実行委員会をベースに企画展示を運営しているケースは希少だと思います。全国公募さらには国際トリエンナーレの形式で開催できる＝運営母体を有する県はそれほど多くはない。日本の中でも特に特筆すべき点であると私は自負しています。

未来の日本型アート企画はこのような運営が理想と考えています。その理由は地元アーティストと地域の人間関係が、街創りの思想や地域愛の絆で融合し育まれているからです。

もちろん課題は多くあるけれど、今年特に印象的なことは、海外作家の元気な展示が素晴らしいと感じました。さらにその展示を支えているのは実行委員の絶え間ない努力の賜物です。国際社会へのメッセージ性もあり興味深い作品も多く、考えさせられる内容に感動しました。関宿の観光としての盛り上がりも上手くかみ合って、企画のダイナミズムを感じました。私自身は西町の並びにある廣森さん宅で展示させていただきました。長い間展示のための相談に乗っていただき、また色々と協力していただきありがとうございます。未来に開かれた亀山トリエンナーレの歴史的な1ページに参加できたことに感謝しています。

実行委員・作家 / 堂本清文

.....

亀山の街と作品がふれあって

今回の亀山トリエンナーレでは、旧坂下小学校の渡り廊下に展示した「小さな学び舎」では、様々な人と話をしました。子ども連れの家族の人は、子どもとお母さんが一緒に学び舎に入り、子どもはノートにお絵描き、お母さんはそれを見守りながら景色を眺めていました。「なんだか落ち着きます。この空間がちょうどいいですね。こんなのがあるといいなあ。」この材料は、妻の実家の窯元で使っていた棚板です。その義父も亡くなり、頂いた板です。自分も癒される空間を作ろうと制作したのです。旧坂下小学校に自分だけの学校(学び舎)を設置しました。

三村家の外壁に展示した「深緑」は平安時代をイメージした作品です。平安時代を記した図鑑をコピーしたものなどを貼り合わせた上にドローイングしたものです。旧東海道の宿場沿いの民家の壁面に展示することで、作品の別の表情を見ることができました。ありがとうございました。

実行委員・作家 / 長縄功太郎

作品が鑑賞者の境界に触れる時

自分の気持ちに同意してくれる人って世界にどれだけいるのだろうか?「自分」のことを語るのは難しくその手段として作品を制作します。亀山トリエンナーレ2024開催の数日後、私の作品についての投稿をSNSで偶然見つけました。

「下調べもそこそこに突撃して思ってもない作品に出会う事があります。私にとって亀山トリエンナーレはそんな意外性を楽しむ芸術祭です。一見カラフルな作品ですが、情報化社会の中、虚構にまみれているメディアを表現しているそうです。真実と嘘を見抜く力がさらに求められているのは、それはそれで悲しいことで、そもそも何かの為に、虚構や讒口をしない自分を強く持たなければと思います。」

人それぞれの答えは様々ですが、私の未熟な作品が鑑賞者の懐に入り互いに啓発された事は、刺激的な体験でした。「作品が鑑賞者の境界に触れる」のは、作者の「意義」でもなく、また「かたち」でもなく、ただ鑑賞者の意のまま「感じる」こと。作品を通し互いに肌の境界に触れ、私は救われた気持ちになりました。

【虚構】とは「事実ではないことを事実らしくつくり上げること」【讒口】とは「他人を陥れるために事実を曲げたり、嘘をついたりして悪く言うこと」

実行委員・作家 / 大岡英介

足踏みすると音がする！

戦争の犠牲になった人達への鎮魂の意味を込めた私の十字架の作品を見に行ってくれた方が、十字架の前で足踏みすると銃のような音がする!と言われたので、十字架の前で床を踏み鳴らしてみると本当に銃弾のようなパンパンパン!という音がしました。実際の銃の音が、どんなものかは分かりませんが、他にも晴れた日に窓から射す光が、まるで十字架のような影になることにも気づき、昔、子ども達の声が響いていたであろう旧坂下小学校の教室にこの作品を展示したことが、何かの縁(えにし)でこの場とコラボレーションして、より思いの深い作品として成立したような気がしました。

実行委員・作家 / 井谷うらん

亀山への想いをグッズに込めて

"亀山には用事がない"友人たちに何度か言われたことがあります。亀山で生まれ育った私は、確かにそうかもね、と答えていました。

そんな私は、縁あって前回の亀山トリエンナーレ2022から実行委員として参加し、公式グッズのアクセサリー作成も担当させていただいています。

今回のトリエンナーレで、亀山で生まれ育ち就職を機に亀山を離れた友人を案内して回っているとき、友人が「商店街にこんなに人がいるなんて!」と冗談半分に笑っていました。

すごいよね、なんて一緒に笑っていた私ですが、少しずつシャッターが増えていく商店街を見てきた私たちにとっては、やはり嬉しいものだと感じます。

そしてその言葉で、私は用事がないと言われた亀山に人が来るイベントを運営する側にいることに気づきました。

子どものころから知っている亀山で、亀山で育ってきたからこそこの縁で関わるようになったイベントで、亀山に来る理由を作っていること、とても感慨深く思います。

そしてもちろん1人の観客としても、たくさんの作品や人に出会えたとても楽しいトリエンナーレでした。

実行委員 / 小倉咲穂

“亀山トリエンナーレ2024”その後残り続ける価値として

2008年亀山市東町商店街をアートで変身させる企画に大変衝撃を受けました。現代アートの作家さんが思い思いに店内や寺院に作品展示。そのような光景を見たことがない私たち市民は驚き感動しました。あれから16年。(経過は中略)亀山市文化年2024の黄色いフラッグとトリエンナーレのブルーフラッグがはためく市内の光景に躍動感を覚えました。今年は関宿および鈴鹿峠自然の家にも範囲が広がり、亀山市の歴史的な価値を展開できたのではないのでしょうか。

作家の皆さんはその場所にふさわしい立体作品や絵画作品で、私たちに現代アートの素晴らしさを訴えかけ種火のように残り続けるものと信じています。この事業をバツクアップした亀山市と実行委員会の熱意と創意に対して、亀山市民として感謝と敬意を申し上げます。

コミュニティCaféを作る会共同代表 / 林千代



報道

Report



竜山トリエンナーレ
2024

2023年5月30日
伊勢新聞



2023年6月28日
中日新聞



2023年5月29日
中日新聞



2023年5月25日
中日新聞



2023年7月18日
中日新聞



2023年8月22日
中日新聞

は、イアン・ネット・ヒルマンがエントラオレを知り参加して、出来る作家達々と会合や市内の下見に訪れて、今年には国内外から立て続けに映像が参加予定、写真や音楽から、立休、絵画、映画などの作品を展示する、事務局長の若者は「ヒルの歴史、文化を訪ねたが、新しい勢力を芸術界に現れてもらえば」と期待する。

（八重蔵）

を決めた。理由については「日本とアル・ニアを繋ぐ集合的記憶の場を開かれた交流を求めたい」と説明する。2002年にアル・ニアとセザル・バルバール・ジョーンで起きた軍事衝突の歴史を秘蔵していた、これまでに訪れてきたアル・ニアの写真と、ヒルマンのアル・ニアの写真を展示するという、作品の目的が達成されて、作品の目的が達成されて、

事務局「三つの宿場町 アートでつながる」

ハシと静かに対峙する。ハシは「それ以外に多くの作家が在りて由を乞ふを恐れ、展示の場を多量に占めざるを欲し、故に自らを犠牲にせざるを得ない」と主張する。佐々木は「その主張は在りて然るべきであらうが、さうは我々作家にとりて極めて大切な事だ。来訪のビクは作中主人公の提出期限と定まる月末日まで待つておられる。新本でも待つておられる」とも影響し、メキシコやフランクフルトまで遠征する海外の芸術家は約10人を出展。市内の商店は古民家、公園などの協力者を台無し、公開ワークショップを来場者、期間中に例年、延べ1万7千人が訪街している。元々は「商売場としての街」を目的に、2008年春の前身イベント「アート・フェスティバル」を開いた。14年春から、3年に1度開く現在の形態に生まれ変わった。

今秋の会場には、新たに「開館と坂下」が加わった。事務局の森登・関根、坂下は「嵐山園、開館、坂下の道の三つの指針で、以前から思いついてきたものがかなり」と笑顔で話している。

2024年4月27日
伊勢新聞

亀山トリエンナーレ概要

ナール実行委員会の伊藤 隆子代表と森坂子事務局
ターで、十月二十七

[illegible]

龜山トリエンナールについて聞き取りをする
研究者ら＝亀山市東町（事務局提供）

京都大や鳥取大の研究者
祭典の効果や仕組み調べる

た	京都大学文学部国語研究所 （京都市）などの研究で、 人が三人、山嵐に迷われ、 四半の間に三つを喰ひ、 現代落首の祭典、山嵐リ エナールのロウ。十日 月廿日、十一月六日の代表 者四人から集るの如き方 仕組にならざる可し。落首 と料亭、地獄社の相見の 関連性を説く。 一人国立感染症研究所 （東京都）で、 と鳥取大、順天薬学部に 在籍して、法政、工学 を専門する。七月九日に と聞き取りながら始めてい	研究者は祭典や地域 や市内外の人たちの ミニゲームとして考へ なについて的を得て いた。京都の三時間 定規落首は「小芝居ま で見る公益祭が権威 ない」と述べた。 山嵐トリは「落首の 振替事務局は」落首の 現事務局長は「落首の ひとつとどういふ」 話した。記者は秋の 古典中間にもおれられ
---	--	--

(八重野)

八重櫻

芸術イベント運営で
政官財のあり方解説

龜山で愛知県立大・藤原准教授



「(龜山トリエンナーレは)表現の自由が担保されている」と語る藤原氏は、亀山市東町で

愛知県立大教育福祉学部の藤原智也准教授（美術教育）が3日、亀山市東町の市市民協働センター・みらいで、講演会「亀山トリエナレの位置・市民に開いた。市民約30人が現代芸術のイベント運営のあり方などに理解を深めた。

蘭學博士「櫻痴」は「あいち」イエンナ」などの芸術イベントは政官財の主導で動き、支持を集めるために芸術祭が用いられている」と可能性を指摘。「表現統制・経済産業、密着、中抜き、談合」などが生じるとのリスクを語った。その上で欧州の形態として「政官財は金が出すが、口を出さない」といった芸術祭の好ましい運営手法を例示していた。

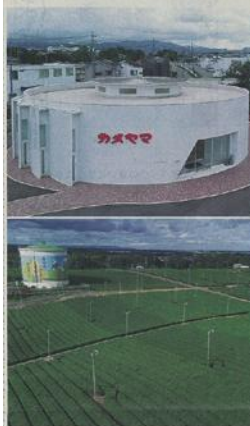
「亀山トリエンナーレ2024」は10月27日～11月16日、同市の旧宿場町として知られる亀山、関、坂下の3宿で開かれる。(八重樫智)

97



アート生む宿場町 亀山

三重で芸術の祭典「トリエンナーレ」



地域ブランド認定品も創出

「トリエンナーレ」は、三重県亀山市の宿場町に由来する。かつては、江戸時代から続く宿場町として栄え、多くの旅人が立ち寄り、物資の集散地となっていた。その歴史を今に伝えるべく、市は「トリエンナーレ」を開催し、現代アートと伝統文化の融合を図っている。

会場となるのは、市庁舎の隣にある「カサマダ」である。ここには、多くのアーティストが作品を展示し、地域ブランド認定品も創出されている。また、市内各所の景色や建物とともに作品を展示する。この祭典は、市内各所の景色や建物とともに作品を展示する。この祭典は、市内各所の景色や建物とともに作品を展示する。

2024年10月2日
日経MJ

亀山トリエンナーレ開幕

現代アートの祭典

作家81組83人、30カ所で展示

「亀山トリエンナーレ」は、三重県亀山市の宿場町に由来する。かつては、江戸時代から続く宿場町として栄え、多くの旅人が立ち寄り、物資の集散地となっていた。その歴史を今に伝えるべく、市は「トリエンナーレ」を開催し、現代アートと伝統文化の融合を図っている。

会場となるのは、市庁舎の隣にある「カサマダ」である。ここには、多くのアーティストが作品を展示し、地域ブランド認定品も創出されている。また、市内各所の景色や建物とともに作品を展示する。この祭典は、市内各所の景色や建物とともに作品を展示する。

2024年10月2日
伊勢新聞

会場 関宿含む30カ所に

国内外の81組83人が参加

27日から「亀山トリエンナーレ」

亀山市内で27日から11月16日まで、現代アートの祭典「亀山トリエンナーレ」が開催される。3年に一度開かれており、今年は国内外の81組83人が参加する。会場中には絵画や造形、映像、パフォーマンスなどさまざまな芸術作品が展示。重要伝統的建造物群保存地区である関宿をはじめ、市内各所の景色や建物とともに作品を展示する。（西村理紗）

関宿の西側に位置する「旧東海道 亀山」は、中心に位置する。この地区は、江戸時代から続く宿場町として栄え、多くの旅人が立ち寄り、物資の集散地となっていた。その歴史を今に伝えるべく、市は「トリエンナーレ」を開催し、現代アートと伝統文化の融合を図っている。

会場となるのは、市庁舎の隣にある「カサマダ」である。ここには、多くのアーティストが作品を展示し、地域ブランド認定品も創出されている。また、市内各所の景色や建物とともに作品を展示する。この祭典は、市内各所の景色や建物とともに作品を展示する。

2024年10月2日
中日新聞

2024年11月13日
中日新聞



共同通信社(2024年)

茨城新聞 / 1月8日
北日本新聞 / 12月18日
愛媛新聞 / 1月8日
東京新聞 / 12月15日
中国新聞 / 12月8日
京都新聞 / 12月25日
東日本新聞 / 12月7日
デイリー東北 / 12月8日



2024年12月1日
広報亀山



2024年10月25日
NHK まるっとみえ

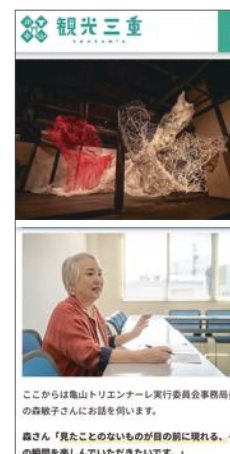


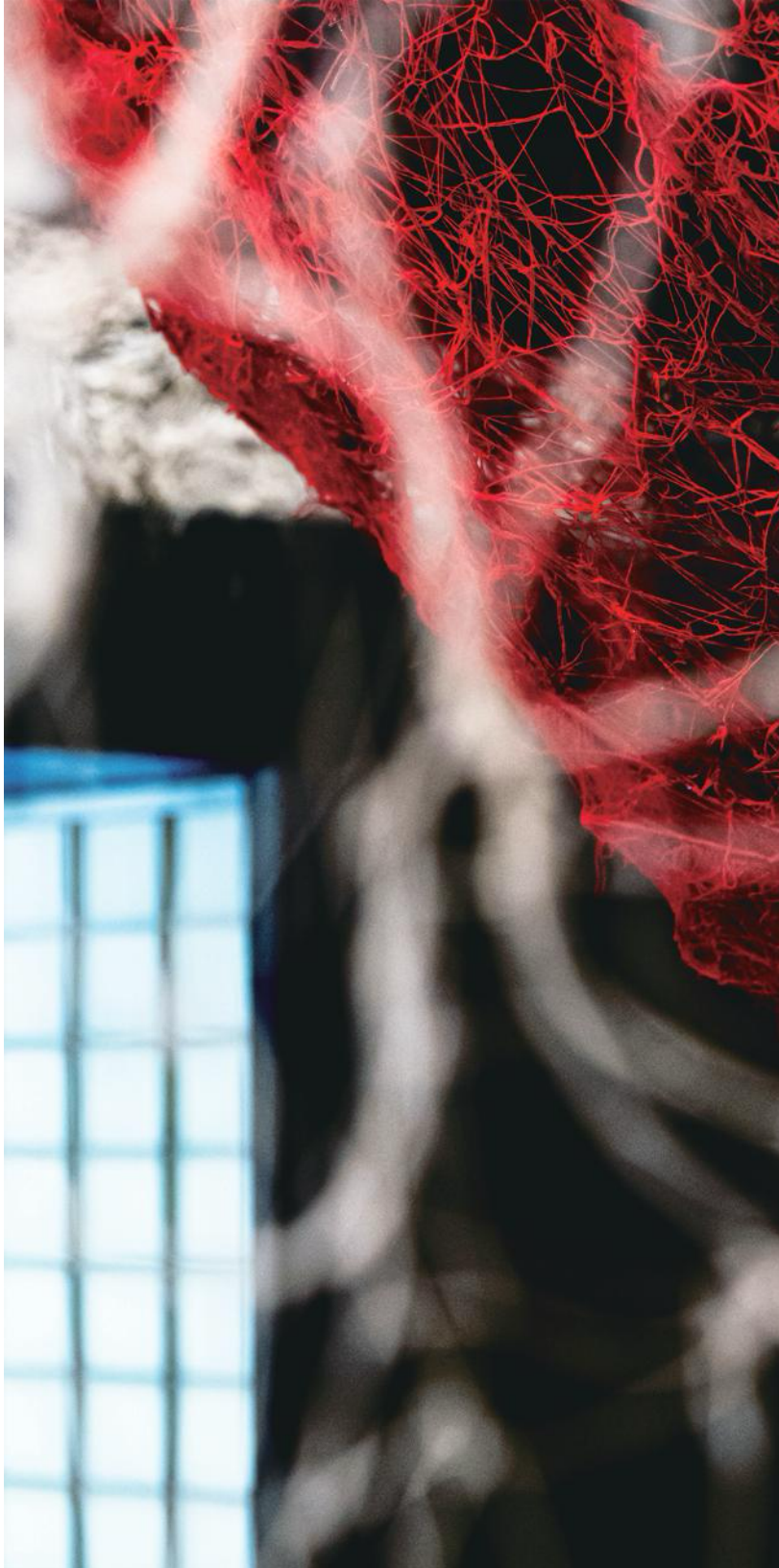
2024年9月23日
OutermostNAGOYA

2024年10月27日
三重テレビ ニュースウイズ



2024年10月31日
WEBマガジン 観光三重





広報

publicity



筑波大学
2024

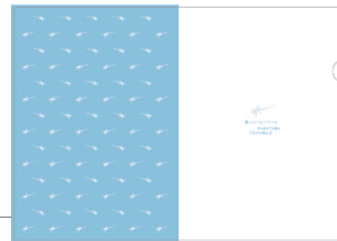
紙媒体

ボランティア募集チラシ



グッズ

クリアファイル



スタッフパーカー



生甘堂謹製
亀山トリエンナーレ羊羹
緑茶 / ほうじ茶



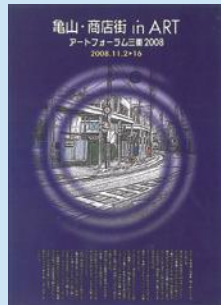
ポスター(表面のみ)/チラシ

チケット(観覧券/招待券)



小倉咲穂制作
彗星アクセサリー
イヤリング / ブローチ

亀山トリエンナーレ 足跡



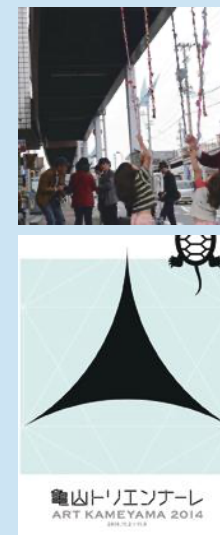
「アート亀山
2009」開催



「アート亀山
2011」開催



「アート亀山
2013」開催



2008

2009

2010

2011

2012

2013

2014

4月 東町商店街の空き店舗にギャラリー開設
土・日のみ運営

8月 ギャラリー周辺でキャンドルナイト開催

11/2~16 「亀山商店街 in ART 2008」開催



コンペティション制度導入

「アート亀山
2010」開催



「アート亀山
2012」開催



「亀山トリエンナーレ
2014」開催

「亀山トリエンナーレ 2017」
プレ企画開催



「亀山トリエンナーレ 2020」
プレ企画開催

「亀山トリエンナーレ 2022」開催



「亀山トリエンナーレ 2024」開催
「かめやま文化年 2024」協働事業

2016

2017

2019

2020
2021

2022

2023

2024

2025



「亀山トリエンナーレ 2017」開催
「かめやま文化年 2017」推進事業



コロナ禍で2年延期



亀山トリエンナーレ実行委員会
三重県文化奨励賞受賞



亀山市制20周年記念式典にて
特別表彰を受ける

亀山トリエンナーレ2024を終えて

3週間はこんなに短い時間だったのか。

亀山トリエンナーレ2024の最終日が近づくにつれ、今の一瞬一瞬が愛おしく時間がこのまま止まってほしいとさえ感じた3週間を過ごしました。

前回の亀山トリエンナーレ2022はコロナ禍の影響で2年の延期を経て、2017年からなんと5年ぶりに開催した芸術祭でした。

それから2年後に亀山トリエンナーレ2024を開催。2年しか経ってないので、正しくはトリエンナーレではありません。

私たち実行委員にとっては本当に慌ただしい準備期間でした。

2023年春、やっと2022年の記録誌ができたばかり。

青いフラッグや駐車場の看板をつい、この間、片づけたばかり。

2023年の春から夏にコンペティションを開催。

夏の終わりにノミネート作家が決定。

10月に亀山で現地説明会開催。

年が明けて2024年には、次々とリサーチのため作家が亀山に来られました。

2月にNYからHRATCH ABARACHさんが来日されて市長をはじめ、亀山市の市民、実行委員の皆さんを撮影されました。作品制作に取り組まれるその真摯な姿に私は感動を覚えました。

アルメリア人としての彼の尊厳、平和を希求する情熱、現在の中東の問題提起、それらすべてが表現された彼のエッジの効いた写真に敬服しました。

他にも次々と作家の皆さまが亀山にリサーチに来られました。

5月には監修の井上隆邦さんを亀山に迎えて、相談会を開催。

2日間に渡って全国から来られた作家の皆さまが井上さんと打ち合わせをされました。

芸術祭の開催には、まず、大切なのはボランティアスタッフ募集です。

実行委員だけでは立ち行かないのはすでに経験済み。

スタッフ募集のフライヤーを作成しましたが、予算不足でモデルもカメラマンも撮影アシスタントも実行委員。寒い風の中、頑張ったのが昨日のように感じられます。

おかげで、多くのボランティアの申し込みをいただきました。

何度も実行委員会を重ねて迎えた搬入日。

街にイキイキした活気があふれていました。

毎回、感じるこの高揚感。

私にとって今までのやってきた助成金の申請や各関係機関との打ち合わせなどの苦労が一瞬にして吹き飛んだ搬入日の朝でした。

続々とアーティストの皆さまが会場入りされ、実行委員、ボランティアスタッフ、依頼していた大工さんをはじめ、行政の皆さん、街の皆さんが一体となって展示に取り組みました。

亀山トリエンナーレ2024がスタートしました。

講演をしてくださった建畠哲さんから「森さん、亀山は小さい芸術祭ですが街に溶け込んだ良い芸術祭ですね。」との言葉をいただきました。時間の関係上、ゆっくりとすべての展示をご覧いただけな

かったのが残念でしたが、井上さんとの旧交を温めながら亀山での時間を楽しまれていました。

亀山トリエンナーレに出展していただくアーティストの皆さんが気持ちよく、全力を出し切って展示していただくこと。それを念頭において実行委員会は動いてきました。もっとアーティスト同士の交流の場が欲しかった、実行委員たちともアートについて語りたかったなどの、ご意見を閉幕後いただきました。次回からの運営に貴重な意見を生かしたいと思います。

人口4.8万人の小さな街、亀山に国内外から81組ものアーティストが参集してくださって開催された国際芸術祭亀山トリエンナーレ2024。(※1名のみ体調不良で不参加)

3週間の会期中来場者は延べ2万人。亀山市一帯が現代アートで彩られました。

いつもは静かな亀山を多くの人たちが青いマップを持って歩き、子どもたちは商店街を走り周り公園で歓声をあげていました。

舘家の前には入場を待つ行列までできていて。

私たち実行委員が見たかった光景が夢でなく現実となって目のまえに現れた3週間でした。

国内外からご出展いただきましたアーティストの皆さま、亀山での展示をこれからの制作の糧として一層、ご活躍されることを願っています。本当にありがとうございました。

多大なご協賛をいただきました岡田文化財団、エアーウォーター(株)に心から感謝申し上げます。

また、ご寄付いただきました市民のみなさま、ありがとうございました。

今回の亀山トリエンナーレは、亀山市主催の「かめやま文化年2024」との協働事業として開催しました。

展示エリアを関宿、坂下地区に拡大して観光という面からも大きく飛躍できました。

行政の皆さまには資金協力を含めて、いろいろと大変お世話になり感謝の念でいっぱいです。

市民活動グループ「魔女のお茶会」の皆さまには亀山茶を淹れていただきありがとうございました。

「café亀山」の皆さま、美味しいお料理の提供ありがとうございました。

そして、ボランティアの皆さま、本当にありがとうございました。

ボランティアの皆さまのおかげで期間中、問題なく運営できました。

店舗をお貸しいただきました多くの住民の皆さまにも御礼申し上げます。

県内外から視察にお越しくださった多くの皆さま、ありがとうございました。

市民主導の亀山トリエンナーレのノウハウが参考になれば幸いです。

2024を終えた今、たくさんの課題が残りました。

今後、いっそう話し合いを重ねて『これからの亀山トリエンナーレ』を考えていかなければなりません。今後の課題をみんなの知恵と力でパワーに変えることにチャレンジしていきましょう。時間をかけて話し合いたいと思います。

いたらない事務局長で、皆さまにはご迷惑、ご心配をおかけしたこともあったかと存じます。ご協力、ご支援に感謝申し上げます。

ご参加いただきましたアーティストの皆さまの今後のご活躍を期待しています。

監修の井上さん、今回もありがとうございました。

伊藤峰子代表はじめ実行委員の皆さま、それぞれの持ち場で頑張って役割を担っていただきました。おつかれさまでした。

私も今できることを精一杯やりきったと感じることができた2024年でした。

亀山トリエンナーレ事務局長 森敏子

ご協賛いただいた皆さま(順不同・敬称略)

公益財団法人 岡田文化財団 コミュニティcafeぶんぶん
エア・ウォーター株式会社 匿名1名(亀山市東町在住)
亀山市 子ども絵画教室 アトリエ・エビ
野間秀一 しぼりや
猫の館 伊藤幸一

お世話になった皆さま(順不同・敬称略)

監修		展示場所をお貸しくださった皆さま		Special Thanks
井上隆邦		高村書店倉庫	阿部家	小阪順子
		今田家シャッター	小林⑤時計舗	野間秀一
		法因寺	崖の上古民家	亀山市市民協働センター
		プランタンさかきや	山形屋酒店	亀山市職員
		元写真のトヨダ	三村家	
		森本薬品	遍照寺	
		元中村こんにゃく店	廣森家	
		トヨダ倉庫	岡田屋本店	
		元アールスペースkusukusu		
実行委員		ボランティアの皆さま		デザイン協力
井谷うらん	市川英司	廣田 愛	小坂 一	井谷うらん
市川雄康	伊藤幸一	儀賀 一成	高尾 佳代子	市川英司
大岡英介	伊藤龍彦	松本 あゆみ	和田 浩典	松岡歩未
倉岡としえ	今岡翔平	木下 啓生	福島 潤一	森 敏子
倉岡雅	岡田桂織	辻原 由紀子	近澤 恵梨	
Cake Hara	小倉咲穂	市川 愛優美	横山 典子	
鈴木幸永	小菅まみ	草川 清香	小倉 美恵	
田村公男	富松みね子	松本 恭子	鷲尾 敏美	
堂本清文	西川真紀	川北 いくみ	倉岡 菜希	
長縄巧太郎	服部智貴	中谷 典子	池田 浩	
藤田昌久	福沢みゆき	野間 和美	塩澤 恵美子	
松岡歩未	豊田元洋	佐野 匡史	山田 いつみ	
山田風雅	リリー・オカモト	豊田澄夫	村林葉子	
森敏子	伊藤峰子	森 久高	木崎美名子	
		上田祐二	蔵城豊子	
		草川美幸	森川幸男	
		平松きち恵	若林敦子	
写真・動画撮影協力				
藤井修二				
瀧本麻須美				
和田浩典				
兼子躍				
一見政幸				
亀山トリエンナーレ実行委員				

編集後記

前回の亀山トリエンナーレ2022から2年半が経ち、子どもが3歳になりました。2022年は出産と制作時期が重なりそれは大変でした。夜泣き、数時間置きの授乳、眠れない日々。――もう少し子どもが大きくなれば楽になるだろう。そんな甘い見通しで2024年を迎えました。

しかし、わが子は予想を軽々と超え、元気でわがままで甘えん坊。おまけに頻繁に病気もします。自分の時間は目に見えて少なくなっていきましたが、出展を決めたからにはやり遂げたい。そして仕事も子育ても手を抜きたくない。私にとって嵐のような日々が始まりました。

作品を完成し展示できたことに大きな充足感を覚え、亀山トリエンナーレ2024のフィナーレ

を迎えた後、最後の仕上げとなる記録誌の制作がスタートしました。

装丁、レイアウトは会場の熱気と感動を呼び起こすシンプルなデザインを心がけ、躍動感が伝わる飾らない写真を選びました。重複表現を調整したり用語を統一するといった編集作業は、遅々として進まず苦戦しましたが、ようやく完成間近となり、万感の思いでいっぱいです。ご協力いただいた皆さまと献身的に支えてくれた家族には、本当に感謝しています。

最後に事務局長の森さんとボランティアの鷲尾さんには、多大なお力添えをいただきました。亀山トリエンナーレ2024が皆さまの心に深く留まることを願っています。

作家・実行委員(記録誌編集) / 松岡歩未



亀山トリエンナーレ

2024

主催 亀山トリエンナーレ実行委員会
監修 井上隆邦
事業協力 亀山市
助成 (公財)岡田文化財団
エア・ウォーター株式会社
後援 亀山市東町商店街振興組合
(公財)亀山市地域社会振興会
亀山商工会議所
(一社)亀山市観光協会

<https://kameyamatriennale.com/>



WEB



Facebook



Instagram

亀山トリエンナーレ2024記録誌は2025年度岡田文化財団の助成を受けて作成しました。

亀山トリエンナーレ2024記録誌

発行日 2025年6月1日
発行者 亀山トリエンナーレ実行委員会
事務局 三重県亀山市阿野田町1060
編集 松岡歩未 森敏子 鷲尾敏美(ボランティア)